

千葉教育

梅

令和5年度
No.683

千葉の子どもたちの未来のために

特集

キャリア教育の推進

○シリーズ 現代の教育事情

県教育庁教育振興部学習指導課

県立習志野特別支援学校 校長

県立茂原高等学校 教諭

川崎 洋子

太田代 里子

○提言

米屋株式会社 代表取締役社長

諸岡 良和



千葉県総合教育センター

学校自慢

創立120周年を目指して ～次のステージへ さらなる飛躍を～

なるかわ けんいち
成川 賢一
県立多古高等学校校長



1 歴史ある地域の伝統校

本校は、明治40年に多古町立多古農学校として開校した後、昭和24年に県立へと移管し、地域の人材育成に寄与してきた。今年で創立116年目の伝統ある学校で、現在は普通科2学級、園芸科1学級を擁する小規模校である。

2 本校の特徴

(1)コミュニティ・スクール

平成24年にコミュニティ・スクールとなり、学校運営協議会を設置し、学校内外での様々な取組に対し、多古町や地域の方々から人的・財政的支援を頂いている。

①朝の挨拶運動

課業日の午前8時～8時40分に、学校運営協議会の委員が中心となり、生徒に登校時の声掛けを行っており、すでに10年以上続けられている。役場職員など地元の関係者の協力も得て、毎日約10名が交代で参加してくれている。

②地域のイベント参加

多古町あじさい祭り、いきいきフェスタTAKO（産業祭）等に園芸科、家政部が出店、吹奏楽部が中学校や民間団体と一緒にステージ発表で参加している。

③生産した農産物の販売

園芸科では、野菜の苗、シクラメンをはじめとした花卉の販売を行っているほか、米や野菜を多古町の学校給食用に提供（販売）している。

(2)少人数制の授業展開

選択科目以外に、国語・数学・英語で分割授業を展開している。

(3)丁寧な進路指導

1年生の早い段階から一人一人の進路希望達成に向け、各種ガイダンスを計画的に実施し、進路決定率100%を目標としている。

(4)充実した安全教育

多古町には鉄道が通っておらず、バスの本数も少ないことから、約20%の生徒に原付バイク通学を許可している。許可生徒には、年間数回の実技講習会を学校で実施し、香取警察署交通課にも協力を仰いでいる。

3 本校SDGsの取組

(1)いちごスムージーの開発・販売

農業クラブの生徒が、フードロス削減の観点から、本校農場で収穫した規格外の苺を使って美味しいいちごスムージーを考案した。何度も試作を重ねた後、道の駅多古の協力を得て一般販売し、購入者から好評を得た。



(2)コオロギプロジェクト（仮称）

今年度より、多古町・民間企業・東京農業大学との産官学連携事業として、コオロギの養殖・研究を始めた。生物部の生徒が世話・データ採りを担当し、来年度以降に研究発表を予定している。

- ◆学校自慢 創立120周年を目指して～次のステージへ さらなる飛躍を～ 県立多古高等学校校長 成川 賢一
 ◆提言 経営者として学校教育に望むこと 米屋株式会社 代表取締役社長 諸岡 良和…2

シリーズ 現代の教育事情 キャリア教育の推進

- 系統的なキャリア教育の推進に向けて 県教育庁教育振興部学習指導課…4
 ■児童期の今必要な力を育てるキャリア教育 県立習志野特別支援学校校長 川崎 洋子…6
 ■街にこそ、師あり！～『茂高街塾』の取組・入学から現在までの報告～ 県立茂原高等学校教諭 太田代里子…8

チーム学校の仲間たち

- 学校を創る 「ものづくり 人づくり 夢づくり ～下総高校の取組」 県立下総高等学校校長 長野 泰紀…10
 ■学校を支える 学校をアップデートする～「つながり」を意識した教頭の役割を通して～ 八街市立八街中学校教頭 榊原 岳…12
 ■学校を動かす 家庭科の魅力とは～生徒の力を最大限に引き出す工夫を～ 船橋市立第一中学校教諭 船迫 千春…14
 ■授業を創る 一人一人が深い学びを具現化し、わかる・できる喜びを味わう体育学習～学びの系統性をとらえ、自己実現できる学習を通して～ 船橋市立行田中学校教諭 柘植 晴登…16
 ■授業を創る 生徒主体の生徒会活動を目指して 県立安房高等学校教諭 塩谷 康介…18
 ■学校で伸びる 子供が見えない所を伝える 白子町立白濁小学校教諭 野村 恵伍…20
 ■学校で伸びる 「発信する力」の育成を目指して 印西市立船穂中学校教諭 上島 直也…20
 ■幼児教育の今 主体的な学びと協働的な学びで、小学校にバトンタッチ!! 東金市立公平幼稚園園長 市原 純子…21

長期研修生報告

- 令和4年度長期研修生の研究の紹介 令和4年度長期研修生…22
 ■教職大学院研修生の研究の紹介
 個別最適な学びを実現するための学びの枠組みの在り方ー小学校4年生算数科の授業実践を通してー 市川市立富貴島小学校教諭 割田陽二郎…26
 不登校対応のための小学校における別室支援の在り方ー不登校支援の現地調査を通してー 松戸市立根木内小学校教諭 齋藤 潤…27

ケーススタディ～Change the world～

- ICT環境整備とICTを活用した授業改善・業務改善 県立長生高等学校校長 河野 安勝…28

情報アラカルト

- 令和5年度「センター研究発表会」のご案内 県総合教育センターカリキュラム開発部研究開発班…30
 ■令和5年度「全国学力・学習状況調査」結果の活用について 県総合教育センター学力調査部…31

学校 NOW!

- 我が校の働き方改革 みんなで取り組む働き方改革 いすみ市立東海小学校校長 青木 慎哉…32
 ■高校NOW! 【連載・県立高校の今】第4回 鎌ヶ谷西高校（保育基礎コース） 国府台高校、成東高校、大多喜高校（教員基礎コース） 県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室…34
 ◆発信！特別支援教育 思いっきり遊ぶ単元の魅力 単元「まいにち すべりだい」～すべり台ランドを作って、みんなで遊ぼう～ 千葉市立金沢小学校教諭 吉田 優子・鎌田 俊一…38
 ◆千葉歴史の散歩道 土器ッと古代“宅配便” 県教育庁教育振興部文化財課文化財普及・管理班 上席文化財主事 西村 壇

道 標

平成23年1月の中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」は、従来の学校段階ごとの考え方や、教育界、産業界等ごとの立場を超えて、各界が一体となって取り組む必要性を現状分析から具体的方策まで網羅的に提言し、幼児期の教育から高等教育までを通じたキャリア教育・職業教育の在り方をまとめた画期的な答申であった。

国は、教育振興基本計画（以降、計画という。）にその趣旨を取り込み、現在の第3期計画でも、五つある方針の中の目標の一つに「社会的・職業的自立に向けた能力・態度の育成」を掲げ、キャリア教育・職業教育の推進をうたっている。

本県においても平成22年3月の第1期計画から現在の令和2年2月の第3期計画まで「キャリア教育」を主な取組と位置付け、現計画では、特に「学びを将来へとつなぐ系統的なキャリア教育の推進」を重点に置いている。これを受け、高校生を対象とした「課題探究型キャリア教育ゼミ」の実施や、「小・中・高等学校を通じた系統的なキャリア教育」という視点での「キャリア教育の手引き（令和5年3月）」の改訂など、キャリア教育の一層の推進を図っているところである。

本号では、本県のキャリア教育推進の現状について紹介する。この特集が各学校が目指す「系統的なキャリア教育推進」の充実に向けた一助になれば幸いである。

【お詫びと訂正】 菊号34ページの筆者名のふりがなに誤りがありました。お詫びしますとともに、次のとおり訂正します。
 （誤）村田 正志（むらた まさし） → （正）村田 正志（むらた ただし）

経営者として学校教育に望むこと

米屋株式会社 代表取締役社長 もろおか 諸岡 よしかず 良和



私は成田市にある米屋株式会社という和菓子製造会社を経営しております。成田山新勝寺の参道にある總本店をはじめ県内28店舗で直営店舗展開をしております。またその他にもスーパーマーケットやサービスエリア、空港、駅ナカなどの商業施設や交通施設、セブンイレブンやファミリーマートなどコンビニエンスストアでも商品を販売しております。

創業は明治32年（1899年）で、当初は成田山参詣のおみやげとして羊羹を販売しておりました。その後缶入り水ようかんを開発し全国に販路を広げ、現在では千葉銘菓を基幹事業として展開しています。その中でも最も人気のある「びーなっつ最中」は本年発売25周年を迎えました。今後も日常のおやつから贈り物、そして節句や冠婚葬祭の引き出物など、人生のいろいろな場面でご愛顧いただける商品を提供させていただきます。

企業経営をしていくうえで最も重要な資源は人です。ですから企業の発展は人の育成や成長にかかっています。企業はあらゆる方法で人への教育を実施しますが、当然それには学校教育が大きく影響を及ぼします。学校教育は企業の発展にも大きく影響を及ぼしているのです。そこで、企業経営をする立場として学校教育で重点的に指導していただきたいことを三つ提言いたします。

一つ目は国語（日本語）です。これがすべてのスタートだと私は考えています。日本語を正しく理解することで知識の習得だけでな

く思考力も高まっていきます。

私たちは目や耳から多くの情報を得ています。人間が他の生物とは比較にならないほど高度なコミュニケーションをとることが可能なのは言語と文字を持っているからであり、それが人類の発展につながりました。特に文字は記録することが可能ですから、培った英知や経験などの膨大な情報を後世に伝承させることができ、それにより高度な文明を築くことができました。

私たちが何かを考えているときは頭の中で会話をしています。そしてそれをほとんどの人は日本語で行っているはずです。思考する際は適切に言語化されていないと論理的に処理することはできません。またイメージや状況を表現する際も言語化が必要であり、それができないと相手には伝わりません。言語化する能力が高いほど思考力や伝達力は高くなります。それを養う学問は国語です。

以上より情報の収集、整理、発信をする能力や思考力を高める国語教育に注力することは人の成長につながるのです。そしてそれは日本社会の更なる発展の礎となるのです。

二つ目は歴史です。歴史は繰り返すというように人類は何千年も前から同じようなことを繰り返しています。その最たるものが戦争です。戦争は悲惨でどれほど愚かなことであるか知っているのにその惨劇は無くなりません。ロシアによるウクライナ侵攻が昨年現実となってしまったこともそれを表わしていま



す。「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」とドイツの宰相ビスマルクが述べました。変化の激しい現代において歴史から予測できること、教訓とすべきことの価値はますます大きくなっています。

世界との距離がますます近くなるこれからの時代は地球規模での考察と海外の方々との協働が当たり前になることでしょう。その際に重要なことはアイデンティティです。相手を知ることは非常に大切ですが、それ以上に自分が何者であるかを知り伝える方がより大切です。自分が何者かを知るうえで欠かせないのが歴史です。特に近代史を学ぶ意義は高まっていると思います。

日本は歴史問題を抱える国々と近接しています。日本の歴史がすべて素晴らしいわけではありません。辛い歴史や悲しい歴史、繰り返してはならない歴史もたくさんあります。しかしそれらを含めて我々が事実を正しく理解し、それを今後活かすことが必要です。「歴史を忘れた民族は滅びる」という言葉があります。大和民族の未来永劫の繁栄のためにも歴史を学び続ける義務があるはずです。

そして三つ目は道徳です。道徳という教科は正解があるわけではないので学校で教育するのは難しいのかもしれませんが。また受験科目ではないので疎かになりがちなのかもしれません。しかし正しい倫理観が教育、経済、政治などすべての人間の活動の根本になるものですから、一生学び続ける必要がある重要な学問だと思います。

私は稲盛和夫氏を敬愛しています。稲盛氏は京セラと第二電電（現在のKDDI）を創業し、破綻した日本航空を見事に再建しました。2023年3月期には3社合計で売上高は約3兆6千億円、従業員数は13万人を超えます。そ

れだけ偉大な会社を起業、再建された稲盛氏が最も大切にされたのはフィロソフィーと呼ばれている企業理念です。稲盛氏は損得ではなく善悪で、つまり人として何が正しいかをベースに経営し大成功を収めました。激しい企業間競争においても道徳が不可欠であり、それが成功を収める方策であることが立証されているのです。

人間は社会的動物であり、他者との関係無くしては存在することはできません。私たちは他者によって生かされ、そして私たちが他者を生かし、それが社会を形成しています。社会でしか生存できない私たちは社会が良くなるため、世のため人のために尽くすことが私たち一人一人の責務だと思います。学校もまた一つの社会ですから、学校で道徳を学ぶことは大変意義のあることだと思います。

コロナが収束し数年ぶりに海外に行くと、日本の凋落ぶりを肌で感じます。本当に日本は貧乏な国になってしまいました。少子高齢社会で労働力が不足し給与水準が低い日本の競争相手は、物価高が続く欧米諸国や成長著しい新興国ですから、今後も大変厳しいものになるでしょう。そしてそのような国々とも協調し、世界平和のために努めていくことも求められます。先にも述べましたが今後は世界に目を向けて生きていくのが必須です。

世界視野、世界で活躍できる日本人を育てていくのは私たち大人の責務です。私たち日本人には世界から尊敬される精神性や高い技術力を備えていますし、素晴らしい文化や自然も持っています。日本の実力はまだまだこの程度ではありません。子供たちに充実した学びを提供し、この国と世界が明るく希望に満ちた未来になるように、私たちができることをしていきましょう。

系統的なキャリア教育の推進に向けて

県教育庁教育振興部学習指導課

令和4年3月に策定された「千葉県総合計画～新しい千葉の時代を切り開く～」においては、全ての子供たちが夢や目標を持ち、将来、生まれ育った地域や世界で活躍することができるよう、個々の能力や可能性を最大限に伸ばし、千葉県の未来を担う人材を育成することが求められているとされている。県教育委員会では、同計画の取組の一つである「学びを将来へとつなぐ系統的なキャリア教育の推進」に基づき、働くことの意義や尊さ、学校における学びと自分の将来との関連などを考えさせる様々な取組を実施している。本稿では、その一部を紹介していきたい。

1 令和4年度までに開始した主な取組

「職業理解と進路選択能力の育成」「社会人として求められる課題対応能力の育成」「高校生の就職支援」の三つの柱に基づき、各種取組を進めてきた。

(1)職業理解と進路選択能力の育成

「ちばで発見！職業観育成コンテンツ」として、実社会で働く人々のドキュメンタリー動画や、高校の専門学科を紹介する動画を令和4年度に制作した。中・高校生が産業や職業についての理解を深め、職業意識の形成や主体的な進路選択に役立てることができるよう、映像資料とともに、授業で活用することのできるワークシート例を県ホームページで公開している。

また、令和4年度から、「高校生のためのキャリアデザイン講演会」として、県立高等

学校において、企業経営や科学技術分野等で活躍する著名人による講演を実施している（令和4年度実績5校）。講演内容は動画に編集し、県内高校生向けに限定公開して、高校生が様々な生き方や考え方に触れ、職業観を養い、見通しをもって学校生活を送るきっかけとすることを目指している。

「ちばで発見！職業観育成コンテンツ」職業編の内容

職業編 8本（各5分程度）

業種	企業	所在地	出演者
情報・IT	株式会社ZOZO	千葉市	経営者・ディレクター
農業	GREEN GIFT株式会社	横芝光町	経営者
工業	フクダ電子株式会社白井営業所	白井市	製造部・生産技術部
水産	嘉平屋株式会社	銚子市	製造部門・梱包出荷部門 販売部門
観光	小湊温泉 吉夢	鴨川市	フロント係・ルーム係 総料理長
福祉	特別養護老人ホーム柏きらりの風	柏市	介護福祉士・介護士
国際	成田国際空港株式会社	成田市	広報部・整備部
医療	国際医療福祉大学成田病院	成田市	救急科医師・看護師・助産師

【インタビュー内容例】

- ・どんな仕事をしている会社なの？
- ・あなたのどんな仕事をしているの？
- ・その仕事を目指したきっかけは？
- ・その仕事の面白さや難しさはどんなところ？
- ・その仕事にはどんな人が向いているの？
- ・仕事をするうえで大切にしていることは？
- ・千葉県で働いている理由やメリットは？
- ・学生時代にやっておいた方がよいことは？
- ・学生時代はどんな学生だった？
- ・中高生に向けてのメッセージ

(2)社会人として求められる課題対応能力の育成

令和4年度から、専門学科を設置する高等学校を拠点とした複数校グループの高校生が、専門学科の特性を生かして地域課題を設定し、解決に向けて探究活動を行う「課題探究型キャリア教育ゼミ」を実施している（令和4年度、5年度ともに、3グループ9校が活動）。活動は、事業所や市役所等と連携して、職場体験等を交えながら行っている。自己の役割を認識し、他者と協力しながら、主体的に課題解決に取り組むなど、社会人として必要な資質・能力の育成を図っている。



「課題探究型キャリア教育ゼミ」令和5年度テーマ

テーマ①：新商品開発を通じた地域貢献・食育活動

食品ロス問題について、地域を対象に調査するとともに、食品ロス食材等を使用したメニュー開発を行い、こども食堂での商品の提供を目指す。

テーマ②：園児・児童生徒に対するロボット操縦体験・プログラミング学習

高校生がロボットを製作し、地域の幼稚園や小中学校等へ行き、ロボットのプログラミングや操作方法などを子供たちに体験してもらって出前授業を行う。

テーマ③：チーム茂原のポテンシャルを生かしたキャリア教育

主体的に茂原市の課題について探究活動を行うとともに、茂原地域の3校が「チーム茂原」として新たな商品開発等の可能性を考える。

(3)高校生の就職支援

平成14年度から行っている「高校生就職支援事業」の対象として、令和5年度は、31校33課程を指定し、指定校が、就職活動を充実させるために、生徒対象の講演会や教員の進路指導に関する研修を行う際の費用、インターンシップ保険費等を補助している。

また、近隣事業所の進路開拓などを行う就職支援教員を18校に配置するほか、千葉労働局と連携してインターンシップの受入れ等を行う事業所の情報を各校に提供している。

2 令和5年度の新たな取組

これまで前述の取組を実施してきたが、本県では、全国平均と比較して高校卒業者における就職希望者の就職率が低く、3年以内離職率も高い状況が改善されず、進学者も含め、高校卒業までに、十分なキャリア意識を育成できていないという懸念が生じている。

また、デジタル化などの社会の変化の中、高校進学段階から全般的に普通科・文系志向が見られ、産業界が求める人材と、教育現場から輩出される人材のミスマッチが起こっている可能性も指摘されている。

(1)キャリア教育の推進に係る調査研究

これらの課題の原因を究明し、改善策を検

討するために、改めて子供たちの職業意識等の実態、産業界が求める人物像等について把握することとした。

現在（令和5年9月）、中高生、大学生、社会人、県内企業等を対象に、順次アンケート調査及びインタビュー調査を実施している。この結果を分析し、本県の課題に対応した、発達段階に応じた効果的な取組を立案し、次年度以降実施していくこととしている。

(2)普通科高校を対象としたキャリア教育実践プログラムの試行

課題となっているキャリア意識の育成に着目し、県立高校普通科3校の生徒を対象に、モデル事業を実施している。民間事業者と連携し、キャリアプランニングや、自己理解の重要性について学ぶ教材、適性等診断テストを活用して、自己を見つめ、目的意識を明確にして卒業後の進路選択につなげるためのプログラムを試行的に実施している。

モデル校の生徒たちの意識の変遷を見取り、次年度以降の展開につなげることとしている。

3 おわりに

令和5年3月に、県独自の「キャリア教育の手引き」を「小・中・高等学校を通じた系統的なキャリア教育」という視点で改訂し、キャリア・パスポートの有効な活用や、各教科の学びとの関わりを意識したキャリア教育の実践などと併せてホームページに掲載した。

この手引きの活用などを通して、本県の子供たち一人一人が、社会の変化に主体的に向き合い、他者と協働しながら自らの将来を切り拓いていくことができるよう、各校においては教育活動全体を通じて、実践的なキャリア教育に取り組んでいただくことを願うとともに、県教育委員会としても、今後ともより実効性のある取組を進めていく。

児童期の今必要な力を育てるキャリア教育

県立習志野特別支援学校校長 かわさき 川崎 ようこ 洋子



1 はじめに

背負った真新しい鞆の重みと戦いながらも元気に登校する姿が愛おしく、目を細めて見つめてしまう新1年生。ようやく学校生活が始まった子供たちにとってのキャリア教育とは何か、キャリア教育の推進が示されて久しいが、それを明言することの難しさはまだあるのではないかと思う。

本校は開校9年目の知的障害を主とする特別支援学校である。小学部単独のため、他学部の教育課程に左右されることなく教育活動を進めていくことができる。半面、卒業後の中・高等部の学校生活をイメージすることが難しい。そのため、将来を見据えたキャリア教育に関しては課題も多い。

2 キャリア教育に関する現状と課題

学習指導要領では、特別活動を要として各教科・科目等の特性に応じてキャリア教育の充実を図ることが示されている。本校でも学校経営の重点目標にキャリア教育の推進を掲げている。係活動や挨拶等は取り組みやすいが、各教科等の学習では難しさを感じている。キャリア教育というと就労と関連させやすいワークキャリア（働く力）のイメージが強く、各教科等の授業で取り入れる具体的な内容が分かりにくいことも影響している。キャリア教育の視点を絞ることで教職員の理解が深まり、教育活動での実践につながるのではないかと考える。また、保護者への周知を図り、連携を進めていくことも重要である。

3 キャリア教育の実践

令和4年度から県教育委員会の「職業教育・キャリア教育の充実」に関する研究指定を受け、校内研究と関連付け取り組んでいる。ここでは、(1)キャリア教育の視点と育てたい力（キャリア発達）の焦点化、(2)授業を通じた実践、(3)教職員や保護者の学びの3点についての取組を紹介する。

(1)キャリア教育の視点と育てたい力の焦点化

①キャリア教育の視点

就労はまだ先である児童期の特に知的障害を有する子供たちにおいては、将来を見据え、この時期に求められるキャリア発達は何を示すのかが分かりにくい。そこで、職業教育と関連性の高いワークキャリア（働く力）の視点ではなく、日々の生活で必要とされる生活全般の基盤となるライフキャリア（暮らす力・楽しむ力）の視点に焦点を絞ることとした。

②育てたい力の焦点化

ライフキャリアの暮らす力、楽しむ力をより具現化して、「育てたい力」として示した。課題対応能力、キャリアプランニング能力、自己理解・自己管理能力、人間関係形成・社会形成能力と関連させて、「活動に取り組み楽しむ力」「見通しをもって取り組む力」「自分で頑張る力」「人と関わる力」の4つの力とした。

さらに、育てたい4つの力の具体的な観点として15の観点を示し、子供の姿として捉えることができるようにした。



育てたい4つの力	育てたい4つの力の具体的な観点 (15)
【活動に取り組み楽しむ力】 (課題対応能力)	『学びに対する前向きな態度』 『興味関心』 『遊び』
【見通しをもって取り組む力】 (キャリアプランニング能力)	『予定』 『夢や希望』 『目的意識』
【自分で頑張る力】 (自己理解・自己管理能力)	『やりがい』 『自己選択・自己決定』 『基本的な生活習慣』
【人と関わる力】 (人間関係形成・社会形成能力)	『伝える力』 『役割』 『応じる力』 『挨拶』 『共感する力』 『集団参加』

* 4つの力と具体的な観点は一対一対応ではなく複数の力に関連する

具体的な観点の一例

『予定』：日課に沿って行動する。変化に対応する。
『やりがい』：「やりとげたい」という思いをもち取り組む。
『自己選択・自己実現』：好きなことや苦手なことがわかる。

(2)授業を通じた実践

①授業作りと展開授業

各教科等の授業の中で、キャリア教育の視点を生かした授業作りはどうあるべきか研究を重ねている。

令和4年度は、これまで校内研究で取り組んできた生活単元学習に絞った。

令和5年度は、教育活動全体を通じた取組に広げ、国語・算数、音楽、体育、図画工作、生活の各教科で授業研究会を行う。

授業作りで押さえるキャリア教育の視点でのポイントについて、育てたい4つの力ごとに明確にして共通理解を図っている。

育てたい4つの力	授業作りで押さえるポイント
活動に取り組み楽しむ力	分かりやすく満足できる内容
見通しをもって取り組む力	期待感をもつことができる授業
自分で頑張る力	実態や課題に応じた単元設定 授業構成の工夫
人と関わる力	友達や教師と関わりを深め、 協力して活動する場面の設定

②キャリア教育の視点での授業評価

キャリア教育の視点をもって各教科等の授業を評価できるように、授業参観での記

録用紙を工夫している。押さえるポイントにより導き出せた子供たちの姿、期待する姿が引き出せなかった場合の改善策についての記入欄を設けるなどしている。

③エピソード記録

子供たちの変化等について、エピソード記録により子供の思いや人との関係性等、キャリア発達の視点で捉え把握している。エピソード記録を基に協議を行うことは、キャリア発達の状況を子供の姿から見とる視点の学びにもつながっている。

(3)教職員や保護者の学び

①教職員の学び

就学前療育施設、本校卒業後進学先特別支援学校、高等部卒業後の就労施設での体験研修や情報交換会を行っている。キャリア教育の視点での共通性を見出し、指導支援に生かす情報を得る機会となっている。

②保護者の学び

学校だよりでキャリア教育の特集を組んだり、全校保護者会等で身近な例を挙げ子供たちのキャリア発達について伝えたりしている。繰り返し周知することにより、保護者の理解が深まってきている。

4 結びに

重い鞆も軽々と背負い、横顔にふと大人っぽさを醸し出す6年生。小学部6年間で、子供たちは心身共に大きく成長する。一つ一つのキャリア発達は小さいが、その積み重ねで、子供たちは将来へつなげる力を身につけていく。改めてキャリア発達を促す視点を持ち、教育活動を進めていく重要性を痛感する。

そしてまた教職員も、一人一人が自らの役割を全うする中で、キャリア発達が促されている。そうした教職員の支えで、子供たちの元気な声や笑顔が今日も校内に満ちわたる。

街にこそ、師あり！ ～『茂高街塾』の取組・入学から現在までの報告～

県立茂原高等学校教諭 おおたしる さとこ
太田代 里子



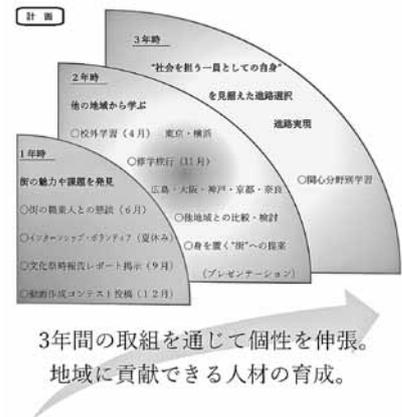
1 はじめに

1年前の今頃、ある大学の総合型選抜の選考書類の「総合的な学習の時間の取組とその学びを生かしてあなたが今後取り組みたいことを述べなさい。」という項目に対峙し、生徒と頭を抱えてしまった。私が担当した生徒達は、コロナ感染症拡大の初回の緊急事態宣言のさなかに入学し、度重なる休校期間を経て、辛うじて修学旅行にこぎつけ、文化祭は3年時に1回だけできるという状況で高校3年間で過ごしたのだ。正直言って、総合的な学習の時間の中では、希望する進路先に胸を張って売り込めるような大きな経験を生徒達にさせられていなかった。……悔しい。大学入試改革が先行して教育改革が進むという現場に自らがいることを痛感し、世の中のニーズに応じて学校現場も変容しなければならないことを突き付けられた気がした。そして、この春、新教育課程の下で入学した生徒達を担当することとなり、社会に何が求められているのか、まずは地域社会に協力を仰ぎ、総合的な探究の時間を上手く使って実践的なキャリア教育に取り組もうと3月末から動き始めた。

2 『茂高街塾』とは？

『茂高街塾』とは、人と人が行き交う場所である『街』について良く見聞きし考え、自らが身を置く『街』のより善いあり方を考えることでより善い生き方を模索し、社会を担う人材として、より善い社会の在り方について考え行動できる力を育むことを狙いとした取組である。次図の計画を、茂原商工会議所や

近隣市町村、教育・福祉関連施設に打診し協力を仰いだところ、快諾をいただき、今年度から次に紹介する活動を実践している。



3 テーマ別『座談会』

6月19日（月）、全22事業所から講師を招き、1学年全生徒160名が2～14名のグループになり、21の分野に分かれて多岐にわたる分野のテーマ別の座談会を行った。生徒は合計2種類の座談会に参加し、初対面の大人との懇談に緊張しつつも、地域の第一線で活躍されている講師の方々による、各分野での課題について迫力のある話を聞き、大いに刺激を受けた。協力いただける事業者側にテーマ設定を一任したところ、私たち教員にとっても、巷で話題となっているテーマを当事者から直接聞ける貴重な機会となり大変に勉強になった。

座談会テーマ

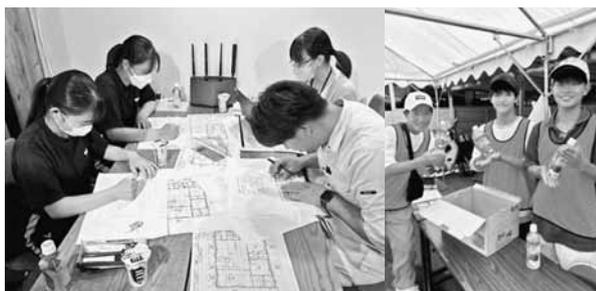
- ①茂原市のものづくり
- ②茂原市の新しい銘産品
- ③流通業界（卸・小売）の仕組みと「物が売れない時代」をどう乗り越えるか？
- ④新しい観光・イベントを考える
- ⑤復活！！茂原七夕まつりA/B
- ⑥「家業を継ぐ」を考える
- ⑦人口減少による産業へ影響
- ⑧ブランディング（値段は誰が決めるのか）
- ⑨商業施設・アスモの拡充
- ⑩脱炭素及び省エネルギーの取組み
- ⑪和装カクテルの復興について
- ⑫ファッションの移り変わりとは今後
- ⑬IT、WEBスキルを地方でどう活かす？
- ⑭料理人になるために修業は必要か？
- ⑮快適な住環境とSDGs
- ⑯建設業界に連休2日が定着するか
- ⑰福祉・介護業界に求められる人材・能力 A/B
- ⑱和食の心・食の安全
- ⑲翌日から翌々日記送へ！？ 2024年問題
- ⑳農業だけで生計をたてられるか
- ㉑豊かな自然で子供を育て





4 『夏街Dive!!』

夏季休業中には、1学年生徒全員が36の協力事業所やイベントにわかれ、インターンシップ・ボランティア体験をした。体験期日の調整を生徒自身が電話をかけて行うなど、生徒自らが主体的に動くことが求められる、大きな成長につながる経験となった。Formsを利用して体験後アンケートを募ったところ、この企画を通じて8割の生徒が自身の成長を実感できたとの回答をし、以下に一部を紹介するような、街の現場で体験したからこそ出てくる生徒達のキラキラとした感想が集まってきた。どれも、受け入れ側の温かくも真剣な対応の賜物であり、街の方々が持つキャリア教育の潜在力を目の当たりにした。2学期になり、何だか遅くなった生徒達を見て、文字どおり、街の現場に生徒達をDive!!させて良かったという確かな手応えを感じている。文化祭時には、この経験をまとめたレポートを掲示発表し、外部への活動の報告や生徒間での体験の共有にも繋げることができた。現在は、掲示やレポート賞の投票を続けており、今後、それぞれの生徒の体験を確かな自信につなげていけるように工夫していきたい。



事後アンケート・御礼より、抜粋!!!

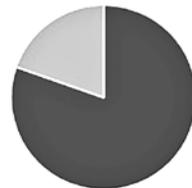
ボランティアする日を一日しか選ばなかったのが後悔です。職員の方々は気さくで私たちにも優しく、子供たちと笑顔で接する姿は、僕の理想の大人でした。(中略) またの機会があればそちらのイベントや体験に参加したいです。(S.K 社会福祉施設でDive!!)

自分の興味のある事を実際に仕事にしている方々と直接お話をしてみて、改めてとてもかっこいいなと思いました。私はまだ将来について決められていませんが、今回学ばせていただいた事はきちんと心に留めておきたいです。(R.T 印刷広告会社でDive!!)

周りの社長さん達が裏方を担当していて、勝手な想像で社長さん達は偉そうにしているかと思いましたが、人一倍働いて僕たち子供にも気遣ってくださっていて、こういう人たちが成功するんだなと思いました。(中略) 僕も皆さんの様に色々な人に優しくできる人になりたいと思いました。(M.M 茂原七夕祭でDive!!)

Q. 夏街Dive!! で、成長できましたか？

● そう思う。	127
● わからない。	31
● そう思わない。	0



5 今後の取組

各自が体験をした分野での魅力や課題をまとめ、持続可能な街づくりへの提言も盛り込んだ動画を作成し、コンテストへの応募や街の方々への報告を予定している。また、動画作成について、夏街Dive!!でお世話になった企業の方から指南いただいたり、地域のSDGsに関する取組に参加を呼びかけていただいたりと、生徒の成長の可能性は広がりを見せている。

6 おわりに

現代の社会において、社会の形成者たる個人に何が求められているかは、時々刻々と変化している。

『茂高街塾』の取組で、学校を街に開き、街の方々の助けを借りたことで、暗中模索の中で、荒波の社会に生徒を送り出すのではなく、確かな灯台を幾つも生徒達に提示することができるように感じている。学校と街との協働は、個人の納得のいくキャリア形成、健全な地域社会の形成、ひいては、善き社会の形成にとって、大きな効果があると実感している。まさに、街にこそ、師あり！である。



「ものづくり 人づくり 夢づくり ～下総高校の取組」



ながの やすき
県立下総高等学校校長 長野 泰紀

1 はじめに

本校は成田市にある、園芸科（農業）・自動車科（工業）・情報処理科（商業）の3つの学科を持つ専門高校である。西暦1900年に地元の方々の努力で設立された小御門農学校がその濫觴である。専門教育により、長く農業をはじめ、地域産業を支える人材を輩出してきた。成田市の北東部に位置するため、香取市方面から通ってくる生徒も多い。また、千葉市や柏市、船橋市など遠方から通ってくる生徒もいる。

2 職業教育の充実～地域社会を支える職業人の育成

表題にあげた、「ものづくり 人づくり 夢づくり」は本校のスクールモットーである。働く力を身につけた持続可能な地域社会を支える職業人の育成を学校教育目標の一つに掲げている。

授業中の様子を見ようと、私はほぼ毎日校内を巡回している。教室で生徒たちは、はじめに授業を受けている。農場で実習中の生徒は実に一所懸命に取り組んでいる。「これは何？」と聞くと作物の特長を教えてくれる。自動車科棟では、これまた熱心に自動車の部品と格闘している。情報処理科の授業でも、パソコンを前にそれこそ「全集中」である。

専門学科の授業では、以前から自分たちで課題を見つけ、話し合い、調べ、解決策を探り、さらに成果を発表するなど、これからの社会で必要とされる力を伸ばしている。

授業の半分近くを専門学科が占めており、高校からの0スタートとなる学習がほとんどなので、素直に、真剣に取り組んで、思いのほか力を伸ばす生徒も少なくない。資格取得も奨励しているが、一人で17の資格を取得した生徒がいて驚いた。3学科あるので、例えば園芸科の生徒が工業関係の資格を取るなど、学科を超えた資格取得も多い。

本校は文科省指定の農業経営者育成高校でもあり、園芸科1年生は寮で一定期間共同生活を行うことで、多くのことを学んでいる。

職員は学習面にしても、生活面にしても、実に丁寧な生徒のことを見ている。困難を抱えた生徒も少なくないが、一人の職員が抱えず、チームで対応することを基本にしている。継続的なキャリアガイダンスを重ねて、この3月の卒業生の進路決定率は99%となった。農業クラブでは、意見発表の部で昨年度は全国大会に、今年度は関東大会に進んだ生徒がいた。自動車部はエコカーレースでワンツーフィニッシュを飾り、コロナで大会中止の前からの通算で全国優勝7連覇となった。

3 風通しの良い職場づくり

教職員の長時間勤務は社会問題となって久しい。ストレスで心身を病んでしまう例も多く聞く。学校ではマルチタスクで多くの仕事をこなさなければならない現状がある。

一方で、自分の後ろには誰かがついていて、一緒にやってくれる仲間がいる、となると、気持ちはずいぶん楽になる。実際、困難と思



トウモロコシの育成調査をする園芸科生徒

われることでも、みんなで力を合わせれば乗り越えられないことはそんなにはない。

職員には、年度初めに「生徒のためになることなら、思いっきりやってほしい。責任は私がとる。ただし、教頭先生には相談してほしい。」と話している。職員には自信をもって仕事に取り組んでほしい、という思いからだ。

また、国の動向から、地域の情報まで、可能な限り職員に話すようにしている。方向性を示した上で「先生はどう思う？」と意見を聞くこともよくある。職員はみな、本当に一所懸命に取り組んでくれている。感謝しかない。職員が自分たちで考え、意思決定に関わることで、モチベーションやストレスの度合いも変わってくる。ストレスチェックの団体としての数値は、ここ数年70台と良好である。校内を歩いていると、職員から新たな提案を受けることも少なくない。もっとも、私が安穩としていられるのも、教頭がうまく裁いてくれているからなのである。

4 コミュニティ・スクールの制度の導入

私は多古高校の教頭として、学校運営協議会に関わったときに、地域の方々に生徒たちが声をかけられ、自己有用感を高めていく様子や、生徒が地域に出ることで地域がより元気になっていく姿を目の当たりにした。そこ

で、校長として本校に赴任した令和3年度に、職員にコミュニティ・スクール導入の意義を説明して、理解を得て、秋には県の生涯学習課に相談して、同4年度からの制度の導入を決めた。

走りながら体制を整える感じがあったが、初年度から、地元商業施設での3学科合同イベントの開催で、新たに生徒が地域に出る機会をつくってもらった。中学校訪問で使える学校宣伝用チラシもつくってもらい、大いに助かった。チラシの作成は、委員の方々が構成から編集までやってくださり、職員がしたことは生徒への執筆依頼の連絡くらいだった。委員の紹介で、成田国際空港株式会社から伐採木のチップをもらって、園芸科の野菜づくりに利用する研究を進めている。進路の就職面接練習では、委員の方々にも面接官になってもらった。長年会社経営や短大、専門学校の学生の指導に携わっている方々の指導なので、実にありがたい。また、昨年度、委員長名で人事に関する意見具申を出してくれたことで、県教育委員会の理解を得て、今年度は懸案事項が解決している。

私は今年度末で役職定年を迎えるが、私が本校を去った後も、学校運営協議会の委員のみなさまが、本校職員や保護者と手を携え、本校が地域とともに歩んでいく取組を、今後とも進めていってくださるはずである。

5 おわりに

生徒たちには、機会あるごとに、「自分を大切にすること、周りの人を大切にすること、物事を最後までやり切ることを実践してほしい」と伝えている。生徒たちが、本校で学んだ力で人生を切り拓き、幸せな生涯を送ってもらうとともに、自分にできることで社会に貢献してほしい、と願うばかりである。



学校をアップデートする ～「つながり」を意識した 教頭の役割を通して～

八街市立八街中学校教頭 さかきばら 榊原 がく 岳



1 はじめに

本校は、「未来への道を切り拓くことのできる生徒の育成」を学校教育目標に掲げ、「生徒が主役の学校づくり」に取り組んでいる。全国的な少子化の流れの中で、本校の生徒数も減少傾向にはあるが、地域や保護者の学校に対する関心は高く、本校の教育実践にも非常に協力的である。

本校が位置する八街市は、平成9年度より、全国に先駆けて「幼小中高連携教育」を推進し、「学校改善」「14年間を通した継続指導」「家庭や地域との連携」を3本柱に、それぞれの校種をつながりを活かして「生きる力」の育成を目指している。

教頭として、校長が目指す学校像と八街市の教育施策の理解に加え、今日的な教育課題に対しても鋭敏な目を持つことが必要であると考えている。特に、教育機器のICT化、GIGAスクール構想の推進、生成AIの台頭など、次世代の教育環境や人材育成を俯瞰した先進的なビジョンを持つことが重要である。教頭として着任後、これらの課題に対して、学校をアップデートすることを目的として、「つながり」をキーワードとした幾つかの実践を行ってきた。これらの取組は「生きる力」の醸成に効果的に働くものと考えている。

2 学校をアップデートする「つながり」

(1) 学校と地域をつなぐ

コロナ禍において、保護者や地域との連携は困難を極めた。しかし、GIGAスクール構

想の急速な推進に伴い、一人一台PC端末の時代が到来した。本校では、コロナ禍においても、PC端末の持ち帰りをいち早く実施し、オンライン授業に取り組むなど先進的な取り組みに着手してきた。このような経験を活かし、令和4年度からは、保護者や地域住民に対して、体育祭や合唱コンクールのオンライン配信をスタートした。また、令和5年度からは、これらの学校行事に加え、連携教育を目的とした小中合同児童生徒集会を地域にオンラインを通じて公開するなど、インターネットを情報配信の重要なアイテムとして積極的に活用している。教頭として、学区の小学校や地域有識者と連携し、効果的な配信を計画したり、地域の声を配信方法に活かしたりするなどの役目を果たしている。これらの取組は、中1ギャップの解消や教員の指導技術やモチベーションの向上にも効果的に働いている。

(2) 生徒と社会をつなぐ

教頭としての役割の一つに、次代のための教育的トピックを見極め、生徒や教職員に伝達していくことがあると考えている。地域や外部との窓口役である教頭として、地域や次代を支える職業人を学校に招聘し、そのキャリアを活かした授業実践を企画することは、生徒のみならず教職員にとっても有益な経験になると考えられる。

令和4年度は外部講師を招いた2回のキャリア教育授業を行った。第1回目は、知り合いの産業医を講師に招聘した「がん教育」授

業である。がん教育は比較的新しい教育トピックではある。しかし、実践を通じて、生徒は最新の治療や予防医学の理解を深めるだけでなく、がんという病から見えてくる人間の尊厳や生き方にまで考えを広げることができた。がんという難しいトピックについて、医師、教頭、学年職員と何度もディスカッションを重ね、対話的な授業を作り上げることができた。



対話形式で実施されたがん教育授業

第2回目の実践は、動画クリエイターを講師として招いた「職業人に聞く」授業である。生徒たちにとって、動画クリエイターは今や憧れの職業でもある。講師探しは難航したが、指導主事時代の人脈を活用し依頼することができた。当日は、活発な質疑応答が飛び交うワークショップ型の授業となった。動画の制作方法、動画が及ぼす経済的効果、デジタルシチズンシップの大切さ、クリエイターとは何かなど、外部講師ならではの話の切り口は、非常に興味深く、生徒の知的興奮や熱気が大いに伝わる授業となった。

いずれも教頭として積極的に授業づくりに関わった事例である。生徒と社会をつなぐ上で、教頭の視線は移りゆく社会情勢にもしっかりと目を向けていくべきである。

(3)PTA活動を次代につなぐ

令和5年度、PTA活動を一新した。コロナによる世相や働き方の変化により、これまでのPTAの在り方を見直す必要に迫られていたからである。令和4年度のPTA役員と協議を重ね、PTA文書のペーパーレス化とSNS化、本部・役員会議の精選、役職の削減など、これからの時代にふさわしい継続可能なPTA活動を目指した内容となった。これまでは、一部の役員の方たちにPTA活動の負担が集中していたが、このような改革により、誰もが無理なく参加できる体制を整えることができた。

教頭の業務において、PTA活動を企画運営することは、学校を支える上でも、保護者との連携においても非常に重要かつ意義深いことである。教頭は、PTA活動を単純にスリム化するだけをゴールにするのではなく、時代の流れに適した最も適切な活動や連携の在り方を模索していく先頭に立つべきであることを実感している。

3 おわりに

学校を支える視点において、生成AIの台頭にも注目している。単なる文章作成、要約、翻訳、画像生成、プログラミング、未来予測などは、生成AIが簡単に回答を提案してくれる時代である。これからの学校教育が担うべきことは、人間だけが持つ主体性、道徳性、創造性などを大いに育むことであろう。そしてそれは非常に価値ある仕事であるはずだ。教頭が一人だけで学校を支えることなど到底できることではない。未来を見据え、これからも人や次代との「つながり」を意識して職責を果たしていきたい。



家庭科の魅力とは ～生徒の力を最大限に引き出す工夫を～



松戸市立第一中学校教諭 ふなさこ 船迫 ちはる 千春

1 はじめに

本校は松戸駅東側の閑静な高台に位置する。広大な校庭は、旧陸軍工兵学校跡地の一部で、周辺には小学校、裁判所、法務局、公務員宿舎、大学、松戸市中央公園などがある。保護者は本校卒業者が多い反面、全国各地からの転入も多数あり、学校への関心も高く協力的である。学級数は特別支援学級も含め30学級で868名の生徒が在籍する大規模校である。また、中学校夜間学級（夜間中学）「みらい分校」の設置校である。

2 家庭科教諭として学校での立ち位置

私はこの「松戸でいちばんいい学校をめざして」という言葉が大好きである。いい学校とは何か。生徒たちが毎日の学校生活で目をキラキラさせる場面や体験することを増やすことで「一中に通って良かった!」と大人になって振り返ることができる気持ちを育てていくことが大事なのではないかと考えている。では、家庭科教諭として生徒たちに一体何ができるのか。

私自身、結婚し娘を妊娠した時に感じたことは「中学校で学んだ内容が、大人になって

役立つことが何一つ、思い出せない。一体私は何を学んでいたのだろうか。」という気持ちであった。そして、それと同時に“生徒たちが一人で社会に出ても中学校で学んだ知識を少しでも思い出し、生きていけるような授業をしよう!”と実生活で強く思うことができた。

教員になりたての頃、先輩教諭が名前のあまり知られていないコンクールに応募し、生徒たちが数多くの賞を受賞し、日々表彰されていた。私が尊敬の気持ちを先輩教諭に伝えたところ「どんな、些細な大会（取組）でも、生徒たちが表彰されて、輝ける場面を沢山作ってあげるの。教師としての努力も必要だよ。」と言われたことが強く胸に響いた。また、ベテランの家庭科教諭が「生徒一人一人の特徴をよく見て、この子は短期間に作品を仕上げる子か、じっくり取り組む子か見極めるの。その子に合った作品展やコンクールに臨ませてあげなさい。その代わりに、その作品展やコンクールで、生徒が恥をかかないように、徹底的に教師が綿密に計画を立てるのよ。」という目からウロコが落ちる知恵を頂いた。その二人の先生方を目標に、人生で一番大事なのは家庭科で学んだ内容であると感じられるように、「松戸でいちばんいい学校をめざして」が達成できるように、そして「一中で一番楽しかった授業は家庭科だった。」と思ってもらえるように、生徒たちに沢山の体験をさせてあげよう。これが私の家庭科教諭としての目標である。



3 家庭科の授業構想

3年間の家庭科をストーリー仕立てにし授業展開している。作品やワークシートはすべて、家庭科室で保管し3年生の最後の授業で「タイムカプセル」と称した封筒に3年間学んだ作品とワークシート、教科書ファイルをすべて入れて封をして持ち帰らせている。封筒の宛名には【大人になったら開けること】と文字を印刷し、「あなた達が大人になって、必要になるときが来たら、この封筒の封を開けなさい。きっと、その時に必要な情報や知識がこの中に沢山詰まっているから。」と最後の言葉を話して授業を終えている。その封筒の中には【フェルトで作った子供のおもちゃお弁当箱、家族を持ったと想定して住みたい家の間取り、子供が誕生したと想定しての名づけ用紙、未来の子供に披露するあやとり&お手玉、チラシで作った食品群表、太巻きデザイン画、中学生レシピコンテスト応募用紙、手作り絵本etc…】中学生で学ぶ内容はどれも自立した時に必要なものである。少しでも生徒たちが中学生の思い出を振り返り、家庭科を思い出してくれたら幸せなことである、と思いながら毎日授業準備するのが楽しみである。

4 作品展・コンクールへの積極的な参加

家庭科では様々な作品展・コンクールがあり、一つ一つの参加条件を見て、授業に組み込み、みんなで参加できないものかといつも思案している。以下のコンクールは実際に授業に組み込みながら応募しているものである。

(1)太巻き寿司デザインコンテスト

千葉県の郷土料理を学びながら、様々な色を表現するためにどの食材や味付けをすればよいのか提案し、取り組み、応募している。

(2)中学生レシピコンテスト

長期休みの課題として家庭で取り組み、レポート提出後、応募している。家庭と学校で連携しながらの取組で、普段自分から料理をしない生徒が家庭で相談しながら作成している。

(3)家やまち住まいの絵本コンクール

3年生の夏休みの課題として毎年取り組んでいる。自分の未来の子供に向けて絵本を製作するが、コンクールのテーマに沿った絵本を毎年応募している。

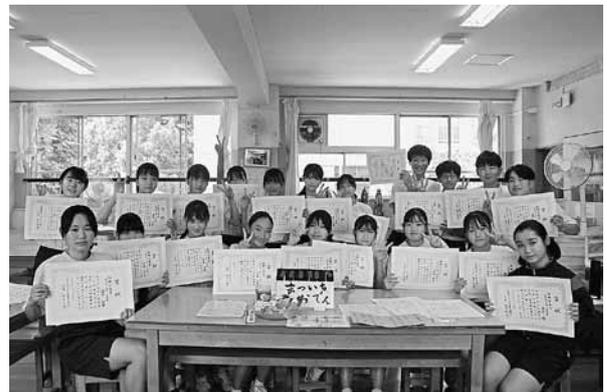
(4)創造ものづくり教育フェア

「豊かな生活を創るアイデアバッグコンクール」

1年生で「布を用いた作品作り」でコンクールに取り組める生徒に声掛けし、生徒と家庭と家庭科教諭で連携しながらコンクールと一緒に取り組む。

(5)家庭科・技術家庭科作品展

授業中での作品製作だけでは物足りず、更に作品作りに取り組みたい生徒たちが力を合わせて3学年一緒の作品を作り、作品審査会に進めるようにブラッシュアップする。これらの取組は様々な場面で学校職員がチームとなって協力してくれているから成り立っているものである。学校職員がチームとなって協力し生徒たちの輝ける機会を増やす取組をこれからも更に増やし、家庭科の重要性を高めていきたい。





一人一人が深い学びを具現化し、 わかる・できる喜びを味わう体育学習 ～学びの系統性をとらえ、自己実現できる学習を通して～

船橋市立行田中学校教諭 つげ はると 柘植 晴登



1 はじめに

船橋市の保健体育科の学習においては「機能的特性を重視しためあて学習」を推進し、市内全体で主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業実践に取り組んでいる。「機能的特性に触れさせる」という点においては、その運動の楽しさに触れさせれば良いという、楽しいだけで学びのない授業になりがち傾向がある。子供たちが単に活動していることで、意欲的に学習しているという錯覚にも陥りやすい。そこで船橋市では、めあて学習（課題解決型学習）をもとに、その運動の楽しさを追求する中で、発達段階に応じた「わかる、できる楽しさ」を見童生徒に味わわせることができる学びの実現を目指して努力している。

本校の研究主題「一人一人が深い学びを具現化し、わかる・できる喜びを味わう体育学習～学びの系統性をとらえ、自己実現できる学習を通して～」は、「自ら学び、豊かな心をもって、たくましく生きる生徒の育成」を踏まえ、前述した船橋市における保健体育科における学びの実現を目指して設定した。以下は、この研究主題をもとに取り組んできた内容の一端である。

2 研究仮説

主題達成に向けて、授業を行う中で三つの研究仮説を立て授業を行った。

【仮説1】単元の系統性を理解させるとともに、ねらいを明確にし、学びの見通しをもたせることができれば、自己に応じた学習を

実現することができるだろう。

【仮説2】生徒の実態に合った運動や活動を選択すれば、わかる・できる喜びを味わうことができるだろう。

【仮説3】生徒主体の活動を保障し、学びを促進させる発問や声かけをすれば、深い学びを具現化できるだろう。

3 研究の実際

仮説1について、今年度行った3年生の陸上競技ハードル走の授業では、学習指導要領解説の例示に基づき、単元のねらいを「スピードを維持した走りで、素早くハードルを越えて記録に挑戦しよう」とした。これは、1・2学年の既習内容（学習指導要領解説 例示）を想起させつつ、さらにタイムを短縮するため、3学年の内容である低く走り越すことに生徒が着目できるよう設定したものである。

仮説2について、生徒が「何を」「どこまで」理解していて、「どのように感じているか」把握するために、3学年球技ハンドボールの授業では「ゲーム中、味方からパスをもらうために一番大切なことはなんですか?」、「ゴール型の授業において、難しいと感じるときはどのようなときですか?」といった記述式のアンケートを用いてこれまでの学びの状況を把握した。その結果から、自然とゲーム展開が速くなるようコートサイズを狭めた。また、オフザボールの動きを増やし空間をめぐる攻防を行いやすくするために「一度のボール保持につきドリブル1回」というルールで行い、

生徒がハンドボールの機能的特性に触れられるよう授業を行った。

仮説3について、自ら課題を設定して、その課題解決を通して学びを深めていけるよう、毎時間生徒の気づきを技能のポイントごとに模造紙にまとめ、学びの積み重ねを視覚化できるように取り組んだ。また、生徒の気づきを促すために、集団競技では毎時間、個人競技では課題に応じて単元開始前に発問計画を作成し、意図的に学びが深まるよう授業を行った。

生徒が学習を進めていく中で、つまずくポイントを事前に予測し、教師の発問を通して、考える視点や運動観察を行う視点を焦点化させる。この積み重ねにより生徒自身の、気づきを促し「わかった」「できた」を経験させる。このことが生徒主体の授業に結び付くと考え授業を創造している。

4 実践の成果

深い学びを具現化し、わかる・できる喜びを味わう学習を実現するためには、生徒自身が得た知識を活用し、自己やチームの課題を達成していく過程を通して、具体的に下記の内容が大切なことであると分かった。

(1)生徒に「何を」「どこまで」学ばせるかという、ゴールイメージを教師側が持つこと。併せて生徒に持たせること。

単元や学年ごとに「何を」「いつまでに」学ばせるかという、身につけさせたい内容を整理し、教科部会で共有し、3年間を見通した学習計画と指導が大切であることが分かった。

(2)生徒主体の学習を教師側が仕組むこと。

単に知識や技術を伝達するのではなく、生徒自身の「学び」を重視するため、ねらいに沿った気づきを促せるような場の工夫（コートを狭める・ルールの制限）をすることや「自らの課題解決」に必要となる教具の充実、活

動時間の確保が重要である。また、学ばせるために、学習資料を用いて「気づかせる」ことが大切であり、生徒に「資料を活用する習慣」を身につけさせるとともに、資料の内容については「文字は少なく」「見る視点を明確にした」資料を作成することで「わかった」「できた」という経験を増やすことができると感じた。

(3)課題に対する気づきを促す発問をすること。

発問内容については、改善策を考えさせる発問（どうしたらいいかな?）と、答えを先に教え、なぜそれが良いのかと考えさせる発問（なぜこうするといいいと思う?）といった発問を使い分け授業を行うことが大切である。そのために、生徒のつまずきを予想した発問計画を立て、生徒の気づきを促す引き出しを教師側がいくつも持っていなければいけないことに気づいた。

(4)知識・技能だけではなく学びの実態についても把握すること。

事前アンケートの内容を検討する中で、「前年度までの既習の内容（学習指導要領解説例示）をどれだけ身につけているか（知識・技能）」「めあて学習や教え合いがどれだけ身につけているか（思考・判断・表現）」「各種目の学習の阻害要因」「どのようなことを学びたいか」といったことを明らかにできるよう質問内容に改善を加えた。生徒の実態を具体的に把握することで、実態に応じた学びを選択することに役立った。

5 おわりに

今後もめあて学習をもとに、発達段階に応じた「わかる、できる楽しさ」を児童生徒に味わわせることができる学びの実現を目指して、これまでの成果に工夫・改善を加えていこうと思う。



生徒主体の生徒会活動を目指して



県立安房高等学校教諭 えんや 塩谷 こうすけ 康介

1 はじめに

安房高校は明治34年に創立し、120余年の歴史を持つ伝統校である。その間、平成20年に千葉県立安房南高等学校と統合し、現在に至っている。平成19年に県教育委員会から進学指導重点校に指定され、単位制の導入による選択科目の充実や特別進学クラスの設置、習熟度別授業や少人数指導の導入等、学習指導や進路指導に力を入れている。校訓は「質実剛健 文武両道」であり、学習面のみならず課外活動においても多くの生徒が様々な場面で活躍しており、特に、陸上競技部、柔道部、剣道部、水泳部、ソフトテニス部は、全国大会や関東大会に出場する活躍を見せている。私は本校5年目、生徒会担当教員として生徒会活動の支援に取り組んでいる。取り組みの中で生徒に伝えていることや意識していることを述べたいと思う。

2 生徒会担当教員として

私が生徒会活動を支援する上で大切にしていることは、「自主自律」した生徒を育てるという視点である。生徒の主体性を育むため、活動状況をよく見極め、安全面に配慮しながら生徒を信頼して、活動の内容や方法を任せられている。学習指導要領でも「生徒会活動は、全校の生徒をもって組織する生徒会において、学校における自分たちの生活の充実・発展や学校生活の改善・向上を目指すために、生徒の立場から自発的、自治的に行われる活動である」とされている。

しかし、実際には教員が主導して様々な活動の準備をしたり、事前に関係する先生方と調整したりということが多く。私はそれを大人主導の生徒会活動と呼んで改善に取り組んでいる。多忙な業務の中、教員が主導して進めた方が、早くて失敗も少ないが、それでは生徒会活動をする意味がなくなってしまう。大人主導の生徒会活動から生徒主体の生徒会活動とするにはどう支援すべきか常に考えている。



生徒会活動の様子

3 意味のあるひと手間

生徒主体の生徒会活動の中で、生徒は多くの失敗を経験する。活動の振り返りを行うと計画が不十分だった、連絡、調整、配慮が足りなかったなどと生徒は語る。しかし、そこが学びのチャンスであると私は考える。その失敗はどうすれば起こらなかったのか、どうすれば防げたのかなどを生徒個人で、あるいは生徒会全体で考え、話し合う。今年度の失敗が来年度は改善されるように生徒会役員は

次の役員への引継ぎ書類を作成している。生徒は自分たちで失敗を経験した分、自分たちの手でしっかりと改善を行い、徐々に活動が良くなっていく。私は、今年の活動がうまくいくかということよりも、長い目で見てより良い生徒会活動になるように意味のあるひと手間を辛抱強く待つことを心掛けている。改善はサイクルとなり、生徒会だけでなく学校の文化として定着していくと私は考えている。

4 生徒が安全に失敗を経験できるように

生徒主体の活動にするための試行錯誤の期間は教員側の手がかかって大変である。しかし、長い目で見れば、生徒主体の活動によって教員側の負担が減っていくことは明らかだ。そんな理想的な形になるまで生徒を支援していきたい。昨年は大変だったことが、今年は何事もなくスムーズに進んでいくと、生徒会組織や生徒個人の成長を感じられる。

5 エージェントを持った生徒

9月ごろになると生徒会役員が改選され、新しい役員による生徒会が発足する。生徒間での引継ぎはあるが、最初から主体的な生徒会活動を計画や運営することは難しい。そこで私は、最初の集まりで、「エージェント」について生徒会役員に伝えている。OECD Education2030ラーニングコンパスでも中心的な概念としてエージェントについて述べられている。エージェントとは、「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力」と定義されている。私の中の自主自律した生徒という目標を具体的な行動や能力として整理して生徒に伝えるときに役立っている。

6 生徒主体は生徒任せではない

VUCAの時代でエージェントが求められている中、これまで生徒会の生徒でさえ自分が所属する学校のことを自分たちでは変えられないと感じていた。しかし、スクールポリシーの作成に際して、自分たちの学校について改めて考える機会をつくったり、校則の見直しを求めて全校生徒の意見をまとめたりする活動をしていく中で、生徒は、少しずつ自分たちで何かを変えていくことができるのだという当事者意識を自分の中に芽生えさせた。主体的な生徒会活動につながる大きな一歩であると感じている。

生徒主体は生徒任せではない。生徒会活動を活性化し、その教育的な価値を高めていくためには、生徒に求める方向性や目標をしっかりと示すなど教師の適切な指導が必要であると私は考える。



リーダー研修会の様子

7 おわりに

生徒会担当教員として、生徒会活動を支援していくことは、大変やりがいのあることである。先生方や生徒から先生のおかげでと言ってもらえるのはありがたいことではあるが、本当は大村はま先生の言うところの「仏様の指」のようでありたい。これからも生徒会活動が活発になるように生徒を支援し、共に学び続けていきたい。



子供が見えない所を伝える

白子町立白瀧小学校教諭 のむら けいご 野村 恵伍



初任者の私は、目の前の活動や行事をただ滞りなく進めることに、手一杯だった。しかし、運動会の応援団担当となった2年目。子供の成長を促す教師の指導の在り方について大きな学びがあった。それは諸先輩方が教育活動の前に子供に活動の目的を尋ね、活動中は他者に目を向ける声掛けをしていたことだ。「なぜ運動会をするのだろうか。」「この頑張りが、この先のここにつながるよ。」そんな声掛けを受けた子供は、主体的に活動していた。「暑いから、〇〇先生がテントを立ててくれたよ。」と伝えることにより感謝の気持ちも、自然と行動に表れた。子供が見えない所を工夫して声掛けをすることで、子供の成長度合いに大きな変化があると感じた。この指導の仕方を意識して、応援団指導を行った。運動会当日、充実感に溢れた子供の姿を見ることができた経験は、私にとって大きな転機だった。

昨年度、2年生担任時「用務員さんが芝を刈ってくれて、体育が気持ちよく出来そうだね。」と話をした。子供は用務員を探して、お礼を言いに行ったそう。低学年でも発達段階や実態に合わせて、声掛けをすることで、自主的に考えて行動に移すことができる。自分自身も学んだ瞬間であった。小さなことでも声を掛け、考える時間を設けて次の活動に進む。この繰り返しは伸びにつながると考える。今後も子供が自主的に考えて行動できるような声掛けをしたい。そして、諸先輩方が私に与えてくれた影響を今度は自分が与えられるよう、精進していきたい。



「発信する力」の育成を目指して

印西市立船穂中学校教諭 かみじま なおや 上島 直也



「国語の授業、つまらない。」これは私が教壇に立ち始めた頃に生徒から言われた言葉である。教員1年目の私は、少しでも生徒たちに知識を詰め込ませようと必死だった。今思い返せば当時の私の授業では、生徒たちは解説を聞き、黒板の文字をノートに写すばかりであった。その結果、このような言葉を言い放たれたのであろう。

自分の授業に自信が持てない中、学習指導要領が改訂された。その中で「主体的・対話的で深い学び」という言葉が私の心に響いた。生徒たちの主体性…。ここで、ようやく私は「自分の知識や経験を基に、言葉を吟味して相手に伝える力」いわゆる「発信する力」が今の生徒に必要なのではないかと考えた。果たして、私の授業でこの「発信する力」が本当に磨かれていたのだろうか。そう自問自答をしてからは「どうしたら生徒が応えたいくなるか。協議したくなるか。」を常に考えながら教材研究に臨んだ。考え、協議し、もう一度考える。そして発信する。国語の時間は生徒たちの声が飛び交うようになってきた。

教員生活も今年で6年目になる。教員の仕事は多岐にわたるが、私はやはり「教科指導」に力を入れていきたい。国語科は言語活動の中枢を担わなければならない大切な役割だと自負している。生徒たちが自らの仕事に誇りと責任を持ち、多様に移り変わる時代を「発信する力」を用いて生き抜けるように、これからも向上心を持って職務に励みたい。

主体的な学びと協働的な学びで、 小学校にバトンタッチ !!



東金市立公平幼稚園園長 いちはら じゅんこ 市原 純子

1 はじめに

本園は3歳児1クラス、4歳児1クラス、5歳児2クラス、全園児90名の園である。近年、外国籍の子供や、特別な支援が必要な子供が増えていることから、言語や発達の課題に配慮したきめ細かな指導支援が求められている。

幼児教育は、教育課程や指導計画に沿った遊びや活動全体を通して総合的に行われている。本園では、さまざまな体験によって、子供の主体性が育まれるように、一人一人の発達段階や個性を見極めた接し方や環境構成に努めている。

2 主体的な学び

園庭の花壇でカマキリを見つけた3歳児。「あっ、横向いた」「手を横にしてる」「片足になった」とつぶやきながら、カマキリの後を追っていく。カマキリが花の裏側に入ってしまうと、「どこがお家なのかな」「何、食べるのかな」と疑問に思ったことを教師につぶやいている。教師は、「どこかしら」と一緒にカマキリの動きを見つめている。近くにいた5歳児が「虫、トンボ食べるよ」と教えてくれた。「トンボ？飛んでたよ」と空を見上げるが、見つけられずに残念な様子。翌日も園庭に出てすぐに花壇を探し始めた。カマキリの生態に興味を持ち観察する中で、『食事』『家』等自分に置き換えて考え、命やその不思議さに気付くことは、主体的な学びである。教師は、子供一人一人の興味・関心を引き出し、寄り添いながら、感性や思考力等の非認知能力が育まれるような言葉がけや援助を心がけている。

3 協働的な学び

今年度は、常設プールでの遊びが再開した。5歳児が『自分たちで遊具を作って遊ぼう』と話し合い、皆で乗れるいかだ作りが始まった。ペットボトルを接着するが、接着部分に水が入って沈んでしまう。再度話し合い、皆で修理をすると大成功。また、その姿を見て憧れを抱いていた4歳児に、5歳児が新たに作り、プレゼントした。一人では作れない大きないかだを友達と協同制作したことで、互いの考えを出し合い作り上げた充実感や試行錯誤する力、やさしさ等を学ぶことができた。この経験が、小学校教育の土台となる10の姿に繋がっていくと考える。



課題として、園児数は今後減少傾向にあり、協働的な学びを保障するための人的環境は厳しく、工夫が必要となっている。

4 おわりに

「主体的」「協働的」どちらの学びであっても、全職員で子供や保護者に温かな眼差しを向け、伴走者となって成長を促すよう心掛けたい。子供、保護者、園の三者で成長を喜び合う関係を作りあげていくことは、幼児教育の質の向上にもつながると考える。

社会

「言語によるかかわり」を通して 社会的事象を捉える生徒の育成

- ツールミン・モデルを用いた公民的分野の授業づくりと実践 -

香取市立佐原中学校教諭（前小見川中学校教諭） えんどう ともひろ 遠藤 友博

これまで私は、社会科の授業実践において生徒が主体的に活動し、学びを深める力を育むことが十分できていなかった。そこで本研究では、議論を用いた社会科授業の実践によって社会認識を形成する能力を高めることを目指し、中学校第3学年を対象として、ツールミン・モデルを組み込んだ公民的分野の単元計画と指導案の作成、授業実践を行った。

その結果、各生徒の「理由づけ」の記述に、自己の立場からだけでなく他者への視点を取り入れるなどの変容が見られた。また他の生徒との意見交換を通して、社会的事象をどのように認識し、議論を通して合意を形成したのか、会話分析により見いだすことができた。今後も生徒が主体的に社会的事象を捉える方法と実践を追究し、広めていきたい。

社会

小中一貫教育を生かした社会的な見方・ 考え方を働かせる学習の探究

- SDGsを題材とした異学年と系統的に取り組む学習を通して -

市原市立五所小学校教諭（前加茂小学校教諭） いしばし けんじ 石橋 賢二

前の勤務校は小学校と中学校が同じ敷地の中にある小中一貫教育校である。その利点を生かし、SDGsを題材とした異学年と系統的に取り組む学習を通して、社会科における「社会的な見方・考え方」を育成することを目指したものである。具体的には、小学校4、5年生、中学3年生で単元の学習内容にSDGsの中の環境問題を取り上げて、授業を実践した。学習の過程を積み重ねることで、児童生徒は、国際問題をより身近に感じるようになっていった。また、異学年合同授業を行い、各学年の考えを伝え合うことで、社会的な見方・考え方を働かせることができた。今後は本研究で得た成果を広めていくと共に、社会科に親しむ児童生徒を更に増やしていけるよう尽力していきたい。

算数

有用性の感得を目指した「比例」の指導

- フェルミ推定を基にした教材を用いる数学的モデリングを通して -

流山市立東小学校教諭（前松戸市立松飛台小学校教諭） ひらた あきら 平田 彰

「算数を勉強しても、何の役に立つのか分からない。」と感じている児童が、普段算数科の授業を行っている中で少なからず見られた。様々な調査結果からも、有用性の感得に課題が生じている現状は明らかである。そこで、小学校算数科第6学年「比例」の単元において、フェルミ推定に基づく教材を用いる数学的モデリングを通じた指導を行い、課題の解決を目指した。更に、独自に作成した「振り返りシート」を用いて学習過程を振り返る場を設定した。その結果、多くの児童が比例の有用性を感得し、教材と指導の有効性を明らかにすることができた。本研究をふまえて、他単元でも学習内容と日常生活の関連を意識しながら教材を開発し「算数は役に立つ。」と児童が実感できる授業を考え続けたい。

数学

数学科における主体的に学習に取り組む 態度の評価に関する研究 - GRITの高い生徒と低い生徒の数学的活動を比較することより -

横芝光町立光中学校教諭（前東金市立東金中学校教諭） なかの まさや 中野 雅也

数学科の学習指導において、生徒の粘り強い取組を評価するべきだと考え、本研究を始めた。GRITと数学科における認知的な能力との相関、更にGRITの高い生徒と低い生徒の数学的活動を比較し、結果について考察を行った。その結果、GRITには認知的な能力と有意な相関は見られなかったが、自分の考えを表現する活動や考えや気づきを記述する数学的活動との関係が明らかになった。このような生徒の具体的な数学的活動により、主体的に学習に取り組む態度における粘り強い取組を行おうとしている側面を評価する指標を提案することができた。今後はこの指標を基に指導、評価の実践を行い、妥当性や信頼性について検証していくことで、生徒の学びに向かう力、人間性等の育成に繋がるであろうと考える。

理科

中学校1学年「光の性質」の学習における日常生活や 社会と関連づけた深い学びを生み出す理科授業の開発

市川市立高谷中学校教諭（前習志野市立第一中学校教諭） みそのう ゆうすけ 御園生 裕介

光の道すじの作図ができる一方で、できる像や光源の形を考えることができていない生徒が多いことに課題を感じ、本研究の主題を設定した。単元の中に、自分の知識や技術を用いて身の周りの光に関する現象（「緊急車両の文字が正しく見えるしくみ」や「水族館の動物の身体がずれてみえるしくみ」）を説明する、対話的な学びを取り入れることで、深い学びを生み出すことができると考え、検証を行った。その結果、検証授業を行った生徒の、光の道すじと像を結びつけて考える力や他者に言葉で説明する力の伸長が見られた。今後は、現場での実践や他の単元での活用を通して、生徒の力を伸ばすとともに、他の先生方にご意見をいただきながらより良い方法を模索していきたい。

音楽

思いや意図をもって音楽と関わる児童の育成 -〔共通事項〕に支えられた思考を伴う音楽づくりの在り方-

市原市立国分寺台小学校教諭 さかまき 酒巻 みどり

今までの教育実践で、児童の多くは〔共通事項〕に支えられている音楽の知識や技能の積み重ねに不十分な部分があるように感じた。そこで、〔共通事項〕を拠りどころにして、思考を伴う音楽づくりの学習指導法を明らかにするため、第6学年を対象に鑑賞と音楽づくりを関連付けた「世界の音楽に親しもう」の実践を行った。知覚と感受を往還させることで〔共通事項〕の働きに目を向けさせたこと、ICTやワークシートを活用した音楽の客観的考察を通して、つくった音楽について自ら振り返ったり、友達と対話をしたりすることによって、思考しながら音楽づくりに取り組む姿が見られた。今後は他学年での有効性を追究していくとともに、音楽づくりの授業デザインを追究、発信していきたいと考える。

体育

投運動において、思考力・判断力・表現力を 引き出す低学年体育学習の在り方 -運動のこつをイメージ化するオノマトペに着目して-

南房総市立白浜小学校教諭（前三芳小学校教諭） かわな ひろこ 川名 博子

投能力において低学年からの技能的格差に課題を感じ、低学年児童が自分で体の動かし方を考える力を育てていきたいと考えた。そこで、低学年から思考力・判断力・表現力を育み、投能力を向上させていく学習の在り方を明らかにしていくため、第2学年を対象として「多様な動きをつくる運動遊び」の実践を行った。低学年児童でもイメージしやすいオノマトペで動きのこつを表現させることで、体の動かし方のこつを表現し、共有することができた。その結果、動き方の理解が深まり、投能力が有意に向上することが明らかになった。今後、低学年から自分で体の動かし方を思考させ、技能向上を促進していく指導方法を研修会等で報告し広めていきたい。

道徳

探究的な学習のプロセスを取り入れた 総合単元的道徳学習プログラムの開発 -「なりたい自分」に向かって考え続ける児童の姿を目指して-

松戸市立和名ヶ谷小学校教諭 まつなが みか 松永 美佳

道徳的価値についての理解に留まることなく、さらに主体的に自己の生き方を考え続ける学習へとつなげることに自身の課題があった。そこで、自己の生き方を問い続ける探究的な学習のプロセスを道徳科に取り入れた総合単元的道徳学習プログラムを開発した。「人とのよりよい関わりについての学習」をテーマとし、小学校5年生を対象に探究のプロセスを繰り返す授業実践を行った。その結果、児童は課題意識をもって学ぶことができ、道徳的価値の理解のもと、他の学習や生活等で学びを生かす経験を繰り返すことができた。本プログラムが、児童にとって学びの有用性を実感する機会となった。今後、他の学年やテーマにおけるプログラムを開発、実践し、さらなる活用を図っていく。

小学校外国語

オンラインで広げる小規模校のSmall Talk -多様な相手とのやり取りと対話の続け方の指導を通して-

香取市立小見川北小学校教諭（前北佐原小学校教諭） まつき たつひろ 松木 辰洋

小学校第6学年外国語科のSmall Talkを行う中で、児童と児童のやり取りが不活発であった様子から、指導の改善をしたいと考え本研究に取り組んだ。小規模校ならではのやり取りする相手の固定化や、対話の続け方の指導の不十分さを課題と捉え、多様な相手とのやり取りと対話の続け方の指導を手立てとして、相手意識をもってやり取りすることのできる児童の育成を目指した。オンライン会議システムを活用し、市内他校の児童や、大学の留学生とのやり取りを行った。さらに、対話の続け方の計画的な指導により、児童らは相手を意識した活発なSmall Talkが行えるようになった。本研究について、作成した教材とともに各種研修会で紹介し、成果を全県に広く還元していきたい。

現代的教育課題

学校教育目標の実現に向けた カリキュラム・マネジメント

-総合的な学習の時間を中核としたカリキュラム・デザインとカリキュラムの評価-

野田市立柳沢小学校教諭 よこた みさこ 横田 美紗子

本研究は、学校教育目標の実現に向けたカリキュラムの編成やカリキュラムを評価し、見直し・改善につながる手法を明らかにすることを目的とした。学校教育目標から育成を目指す子供の姿を資質・能力の三つの柱で整理し、それらが各教科において活用・発揮が期待できる重点単元と、各教科と総合的な学習の時間との間において活用・発揮される関連単元を設定したカリキュラムを編成し、単元の評価結果をカリキュラムの評価に活用した。その結果、育成された資質・能力が適切に活用・発揮される単元配列や単元計画、具体的な学習指導等を意図的に設定でき、目指す子供の姿の育成につながった。授業改善だけでなく、単元計画や単元配列等の見直し・改善にもつながる効果的な知見が得られた。

特別支援教育課題

肢体不自由（重度・重複障害）生徒に おけるキャリア教育の在り方

-キャリア教育の視点を踏まえた学習指導案（試案）を通してキャリア発達の充実を育む-

県立船橋夏見特別支援学校教諭 ごらい だいすけ 午来 大輔

肢体不自由（重度・重複障害）生徒一人一人が、卒業後豊かな生活が送れるようキャリア教育の充実を図りたいと考えた。そこで「個別のキャリアプラン」と「個別の教育支援計画」を参考にキャリア教育の視点を踏まえた学習指導案（試案）を作成した。それによって支援の有効性を示すとともに、個に応じたキャリア教育の目標と内容を明確化した授業づくりをすることができ、キャリア発達を育むことにつながった。その結果、新たな学習指導案にするべく「個別の教育支援計画」の作成上の留意点の見直しや本校教育課程の「キャリア教育全体計画」の新設が求められたため、導入を進めている。今後もキャリア発達を育むための授業の充実を図っていきたい。

企業等派遣

生徒に寄り添うための関わり方と その手法の在り方について

県立特別支援学校流山高等学園教諭 みき まさし 三木 将司

生徒の意欲や主体性、自己肯定感の向上に向け、生徒への関わり方の幅を広げたり、寄り添うための関わり方や手法を学んだりしたいと考え研修に臨んだ。千葉県立障害者高等技術専門校は、就職や自立に特化し、必要な知識や技能の習得を目指した職業訓練を行っている。指導員が訓練生のお話を最後まで聞く、気付きを受け入れる、認める、褒める、自己選択や自己決定などを大切にしながら関わっていたことが印象的であった。

生徒の「自分の障害特性を知る」「納得感をもって行動する」や「気付く」のために、教師が「表面上だけではなく、経緯を明確に捉える」「認める、褒める」や、「気付けるためのきっかけづくりをする」ことなど、研修での学びを今後の学習活動や教育相談に活かしていきたい。

個別最適な学びを実現するための学びの枠組みの在り方 — 小学校4年生算数科の授業実践を通して —



市川市立富貴島小学校教諭 割田 陽二郎

1 研究の動機

児童一人一人の学びのニーズやペースは異なっている。しかし、担任として授業を行っている中で、児童の理解が不十分であっても、次の単元に進まなければならない場面が多くある。

児童が自分に合った学習課題や学習方法を選び、一定の目標を達成できるような指導について理論と実践の両面から学びたいと考え、教職大学院に入学した。

2 研究の実際

前述のねらいを達成するためには、教師が授業全体を細かくコントロールするのではなく、児童自身が自分の学びをコントロールするという発想の転換が必要になる。しかし、このような学習者主体の学びは、放任授業になる可能性もある。

そこで本研究では、児童の学習の個人差が大きい第4学年算数「2けたでわるわり算の筆算」を研究対象に、次のような学びの枠組みで、授業実践を行った。

- 1 単元の到達目標は全員共通とする。
- 2 1時間の到達目標はそれぞれ異なるため1時間の学習で何を学ぶか、どうやって学ぶかは児童が決める。
- 3 何を、どれだけできれば良いか、何時間で学習するかを単元の最初に示す。
- 4 小單元ごとのチェックテストを行い、到達度を教師が把握する。
- 5 いつ誰と学習を進めるか、児童が決める。

児童の学習の進め方は、単元の系統を遡り自分の苦手な所から学び直しをする児童や、友達同士で話し合いながら学習を進める児童など、多様な学びの方法が見られた。単元の学習が進んでいく中で、「ちょっと教えて」といった小さなやりとりが学級内で増えていった。児童一人一人の学習の進度を把握できるため、教師は学習に遅れがある児童の個別指導に充てる時間が増えた。

3 研究の成果と課題

(1)成果

単元の目標達成のための学習内容や学習時間を明確にし、小單元ごとに自分の学習の到達度を把握できる授業設計により、自分の学びに対してメタ認知的コントロールができたことがわかった。さらに、自分で決めた学びであるため、自分の学びに対して粘り強く取り組んでいた。

(2)課題

タブレット端末だけで学習を進めると学習内容の定着に課題が見られた。タブレット端末に表示された問題を、ノートに手書きで計算をする。間違えた時は、教科書の該当ページを読み返すといった紙媒体との併用が学習の定着には必要だった。

また、自分のペースで学ぶ点は尊重しつつ、つまづきが多い所では少人数の指導を単元の指導計画に位置付ける必要があった。

本実践は、単元の系統が直線的である「数と計算」領域でのものであった。今後は他領域や他教科においても、児童が自分の学びをコントロールし、個別最適な学びが実現できるよう研究を続けたい。

不登校対応のための小学校における別室支援の在り方 —不登校支援の現地調査を通して—



さいとう じゅん
松戸市立根木内小学校教諭 齋藤 潤

1 はじめに

不登校児童数の増加が続いている。そこで、校内教育支援センター等の不登校対応の別室（以下、不登校支援室）設置が小学校で進みつつある。しかし、別室支援の在り方は担当職員個人の教育観や知識、経験に依るところが大きく支援の軸や方向性は不安定である。

このことから小学校における不登校支援室の望ましい在り方について指針を示すことを目的とし研究を行った。

2 実践

(1)不登校支援施設への視察

学校内外の不登校支援の現状から不登校支援の全体像を掴むため、近隣の市や県内外で先進的に実践が行われている不登校児童生徒に関わる施設等24ヶ所の視察を行った。

そこで各施設の目指す支援の方向性と児童生徒の過ごし方が関連していることがわかった。過ごし方の観点から不登校支援の全体像を表したのが図1である。

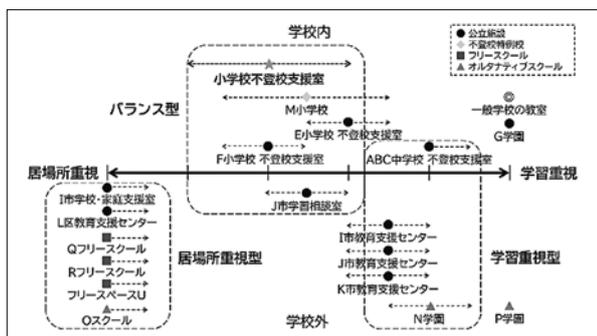


図1 不登校支援全体像

居場所重視型は、やりたいことをして、あるいはやりたくないことはしないで過ごししのエネルギーを蓄えていく場。学習重視型は、主に学習を進めることで、勉強に対する不安を取り除いたり進路を見据えた活動をしたり

する場。バランス型は、学習をしながらも心を休めることができる場である。

タイプに優劣はない。重要なことは、児童が様々なタイプの施設からその時の自分に合った施設を選べることである。

(2)不登校特例校での参与観察とスタッフへの聞き取り調査

不登校支援室における支援の要点を検討するため、不登校特例校で参与観察を行った。半年間、約170時間、担任の補助役として教室に入り児童と関わりながら児童の様子や児童への職員の関わり方を観察、記録した。また職員に半構造化インタビューを行った。

そこで不登校支援の場において大切なのは児童を尊重することであることがわかった。中でもハード面で大切なことは居場所となる環境を整えること、またソフト面で大切なことは職員が児童に寄り添う姿勢をもつことである。

3 考察

小学校における不登校支援室は、図1に示すと若干居場所に寄ったバランス型であり、その指針は次のように提示する。

学習を基本としつつ、自分の好きなことをして過ごすことを許容する緩やかな居場所であること

4 おわりに

校内における不登校支援室の「居場所の機能」に対しては職員や保護者から「甘やかしているのではないか」といった様々な考えが出てくることは想像に難くない。設置の際には職員や家庭と指針について理解を深め共通認識のもとに進めていくことが重要である。

ICT環境整備と ICTを活用した授業改善・業務改善



県立長生高等学校校長 この やすかつ
河野 安勝

本校は、国のスーパーサイエンスハイスクールSSH指定校で、外国語（英語）と総合的な探究の時間の教育課程実践検証協力校である。理数科は理数探究で、普通科は総合的な探究の時間で、全ての生徒が3年間課題研究や探究活動に取り組んでいる。通常の授業でも「探究的な学び」を実現し、探究活動を進める上で重要な「協働的な学び」を展開している。この「探究的な学び」や「協働的な学び」を実践するためにはICTはマストアイテムと考えている。本校は学校組織体制を整え、ICT環境整備とICTを活用した授業改善、そして業務改善に取り組んでいる。

1 学校組織体制の整備

(1)企画推進部

ICT環境整備とICTを活用した授業改善・業務改善を推進している。既存の組織体制のままでは大きな改革は難しいため、令和3年度に新たに設置した。ICTの活用意欲が高い若手職員5名で構成している。クラウド利用の規程を整え、生徒の端末をBYODネットワークに接続し、学習支援ソフトのTeamsやClass Notebookの活用方法などの教員研修を実施している。

(2)情報部

成績処理システムの運用や入学者選抜の成績処理などを担っている。教務や進路に関する生徒情報と、職員の1人1台端末やプロジェクター等の管理を行っている。

(3)進路指導部

Classiやスタディサプリを活用して進路指導に取り組んでいる。Classiで進路希望調査や進路面接の結果を収集して職員間で共有している。また、スタディサプリの到達度テストを実施して、各生徒の基礎力を確認し、苦手分野を克服するための動画を配信している。

(4)アクティブラーニングワーキンググループ

本校の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善の研究チームである。若手職員11名と校長で構成し、ICTを活用した授業改善を推進している。各教科の特色や生徒の実態に合わせたICTの活用方法を研究開発し、実践資料集にまとめるとともに、開発した授業実践の普及を図っている。

(5)ICT支援員（学校DX推進パートナー）

週1日來校し、企画推進部の指示の下、生徒の端末をBYODネットワークに接続したり、採点ソフトの活用方法に関する教員研修会を実施したりしている。

2 ICT環境整備の状況

令和3年度の1年生からBYODを開始し、現在3学年全ての生徒が私物のiPadなどタブレットを持参して授業を受けている。県から配付された貸出用コンピュータは、経済的な理由ではなく、保護者の教育方針で貸し出しを申し出た2年生1名のみが使用している。

Wi-Fi環境は、普通教室と図書室など一部の特別教室は県がBYOD用に整備した。残りの特別教室は、保護者負担でホームルー

ターを5台設置し、使用頻度の低い場所（例えば、体育館や実験室、調理室等）には貸出用のホームルーター5台を用意している。

全ての普通教室と特別教室にプロジェクターとスクリーンを設置し、電子黒板6台とタブレット43台、可動式の机・椅子を設置したアクティブラーニングルームを整備している。

3 ICTを活用した授業改善の状況

全ての生徒が、タブレットをノート代わりにデジタルペンで入力し、ICTを文房具として活用している。



教員は授業中にTeams (@csi.ed.jp) を使用して、生徒に情報伝達するとともに、課題を配信・回収している。生徒はClass Notebookをノートとして活用し、コラボレーションスペースでクラス全員の意見を集約し、共有している。

また、1・2年生は、スタディサプリの到達度テストを年2回実施して、各自の苦手な単元等を明らかにし、自宅等でスタディサプリの動画を視聴して学習している。部活動を引退した3年生は、スタディサプリの動画で基礎力を向上させてから、受験勉強に取り組んでいる。

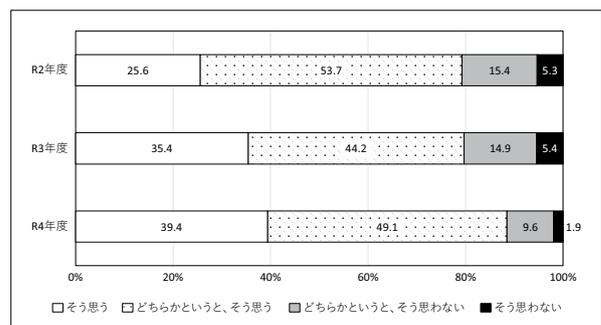
4 ICTを活用した業務改善の状況

教員間の情報共有、情報伝達はTeamsを使っているが別のアカウント (@chiba-c.ed.jp) で行っている。生徒のアカウントと分けることで、誤送信を防ぎ、情報を整理しやすくしている。朝会や職員会議の資料は、エクセルシートで集約してPDF化し、Teamsで配付している。その他にも、特別教室の予約などをTeamsに載せたエクセルシートで集約し、情報共有している。

学校から保護者への情報伝達はClassiを活用している。また、Classiのポートフォリオ機能を活用して進路面談の記録を職員間で共有し、模試成績等を保護者と共有している。

5 効果とまとめ

令和4年度の学校評価アンケート「長生高校の教員は、生徒の学力向上に向け、ICTを効果的に使用するなど、工夫した授業を実践している。」という質問に対し、88.5%の生徒が肯定的な回答をしている。



私は、生徒の学習環境さえ整えば、教員は主体的により良い学びの方法を発見し、実践すると確信している。本校職員には、恐れることなくICTを活用して積極的に新しい学びに挑戦してほしいと期待している。

今後も生徒が効率良く、効果的に学ぶ「個別最適な学び」が実現できるよう、ICT環境のより一層の整備に取り組み、学校全体で授業改善と業務改善を推進して行く。

情報アラカルト

令和5年度 千葉県総合教育センター・千葉県子どもと親のサポートセンター

千葉県誕生150周年記念

研究発表会

千葉の子どもたちの未来のために

～新しい時代に求められる資質・能力の育成をめざして～



全体講演会

令和6年 2月16日(金)

10時～12時 受付9:30～

ハイブリッド式

(対面・ライブ配信)



会場：千葉県総合教育センター

オンデマンド
動画配信

令和6年 2月27日(火)～3月22日(金)

演題 子どもたちも、教職員も、ウェルビーイングな学校づくり

講師

教育研究家
一般社団法人ライフ&ワーク代表理事
大阪キリスト教短期大学教育テック総研 副所長・客員教授

妹尾 昌俊 氏



研究発表

オンデマンド
動画配信

令和6年 2月15日(木)～3月22日(金)

研究発表	担当
既存の教科と教科「理数」の相互発展に関する研究	カリキュラム開発部
「好ましい人間関係を育む学級づくり」に関する研究 ～「学級づくりガイドブック」再編集を通して～	カリキュラム開発部 研究開発班
小学校における自由研究(科学論文)の手引き作成に係る研究	カリキュラム開発部 科学技術教育班
全国学力・学習状況調査の活用推進に向けて	学力調査部
知的障害教育における学習評価から授業改善につなげるフレームワークに関する研究	特別支援教育部
教育支援センターの機能を生かした不登校支援の在り方について	子どもと親の サポートセンター

◆申込方法◆

- ・千葉県総合教育センターWEBサイトより御申し込みください。必要事項を入力すると、特設サイトの「ID」と「パスワード」が返信されます。
- ・特設サイトの開設期間は 令和6年2月1日～3月22日です。 ※資料は申込者各自がダウンロードできます。

◆申込期間◆ 令和5年12月20日(水)～

◆問合せ先◆

千葉県総合教育センターカリキュラム開発部
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13
TEL 043-276-1274(直通)
E-mail sosekaihatu2@chiba-c.ed.jp
※「ID」と「パスワード」の返信がない場合は御連絡ください。

「令和5年度全国学力・学習状況調査」 結果の活用について

県総合教育センター学力調査部

1 「令和5年度全国学力・学習状況調査」 について

「令和5年度全国学力・学習状況調査」が、4月18日（火）に対象学年の児童生徒に対して実施された。今年度は、教科に関する調査として、国語、算数・数学、英語（中学校）の調査が、質問紙調査として、児童生徒及び学校を対象に生活習慣や学習環境等についての調査が実施された。

<教科に関する調査結果>

<小学校>	千葉県	全国
国語	67 (66)	67.2
算数	62 (62)	62.5
<中学校>	千葉県	全国
国語	69 (69)	69.8
数学	51 (50)	51.0
英語	46 (46)	45.6

※数値は公立学校の平均正答率（％）。
ただし、文部科学省の発表に基づき、全国平均正答率は小数第1位まで、県平均正答率は小数点以下を四捨五入。
※（ ）内は、千葉市を除いた割合を示す。
※英語の調査結果については、「聞くこと」、「読むこと」、「書くこと」の合計を集計した数値である。

2 学校全体で分析し、指導改善を推進

県が活用を推進している4つの分析シートを校内研修等で学校全体で活用することで、自校の成果・課題を発見し、指導の充実・改善のヒントを得ることができる。

(1)教科・質問紙分析シート

全国、千葉県、自校の教科の結果がレーダーチャートで表示され、自校の状況について一目で捉えることができる。

(2)経年分析シート

全国と比較した自校の結果について、過去3回分の経年による分析ができる。

(3)クロス集計シート

生活習慣や学習習慣と学力の関係について、

相関関係のみられた設問から、自校の状況を捉えることができる。

(4)誤答分析シート

解答類型別に児童生徒の反応率をまとめた文部科学省のデータから、誤答への反応率が高い設問を選定後、誤答を分析し、改善方策を学校全体で協議することで指導改善につなげることができる。

3 指導改善サイクルの確立を目指して

(1)文部科学省発行の調査結果データ・報告書

調査結果は、地域に向けた情報発信、授業研究などにおける実態把握・根拠データとしての活用、個別最適な学びの実現に向けた活用など、様々な活用方法が考えられる。報告書は分析や指導改善に有効活用できる。

(2)全国学力・学習状況調査活用の手引き

学校内での立場別の取組例など、分析や活用の仕方を分かりやすく記載し、学校現場での授業改善や学校改善に役立つ内容としている。

(3)活用に係る動画コンテンツ

全国学力・学習状況調査の活用を一層充実させるため、動画コンテンツを作成し、県内教育関係者が視聴できるようにしている。（配信URLは市町村教育委員会を通じて連絡している。）

4 おわりに

全国学力・学習状況調査の結果を分析、活用して、各学校の状況に合わせた指導改善サイクルを確立し、学校全体で、授業改善を進めることで、児童生徒の学力向上につなげていただきたい。

みんなで取り組む働き方改革

いすみ市立東海小学校校長 あおき しんや 青木 慎哉



1 学校の特徴

本校の校風をお伝えするとき、私はよく「東海っ子の外遊び」について紹介している。業間や昼休みに、児童のほとんどが外に出て、多くの教員と一緒に校庭を一杯に使って遊ぶひとは、小学校教員の醍醐味であり、見ているだけでも壮観である。人懐っこく元気で活動的な児童と、チームワーク良く、バイタリテイ溢れる教職員は本校の自慢である。また、子供たちとしっかり向き合う時間をもとうと努力する職員の姿は、本校の良き伝統である。

そのような職員集団ではあるが、いわゆる「働き方」について振り返ってみると、定時を超えてからの対応が多く、ワークライフバランスに大きな課題があった。このような現状を改善するため、令和4年度より、職員一丸となって働き方改革を推進してきた。

2 常識にとらわれないアイデアを募集

令和4年度に、全職員が参加するワークライフバランス研修を開催し、みんなで課題についての話し合いを行った。そこでの分析は、「仕事で自分の成長を感じ」「本音を言いあえる環境」である反面、「仕事に追われ生活の余裕がない」「教材研究、授業準備の時間がない」という回答の割合が高く、業務改善の必要性を改めて認識する結果となった。

協議では、実現可能かどうかにかかわらず、常識にとらわれない思い切ったアイデアを募集し、多くの意見を収集する機会となった。例えば、「掃除のない日を作る」といった日課時程の改善案や、「SOSコーナー」「提出物

締め切りコーナー」「教材データ・指導案の保管場所」を設置したいという意見があった。さらには、「朝の始まりを遅らせる」「業務が煩瑣な登校班の解消」といったなかなか思い切った案もでてきた。これらのアイデアを集約し、教育効果への影響や実効性を勘案しつつも、実現可能なものから具現化を目指すこととした。



【ワークライフバランス研修のようす】

3 具体的な取組について

(1)働き方をデータで見える化

まずは実態把握のため、職員の勤務状況を数値化した。時間外在校等時間の平均を県の調査結果と比較したほか、月ごとの変化から、年間を通した繁閑を明らかにした。

さらに、個票（職員個々の平均出退勤時刻、曜日ごとの傾向、月ごとの変化、経年変化等）を配付し、自らの勤務状況を把握することで、自分の働き方に関する傾向に気づき、仕事のペースを工夫していくための資料とした。在校等時間についてお互いに話題にする場面が増え、繁閑の見通しを持った仕事をする上で参考になったといえる。

(2)仕事をシンプルにわかりやすく

長年積み重ねられてきた業務を、「シンプルでわかりやすい」をコンセプトに整理した。

①紙文化からの転換

- 保護者への発出文書は電子化・メール配信とし、印刷時間・紙を節約（ただし保健関係文書等の重要な文書は紙媒体でも発出）
- 配布依頼のあったチラシは、1ファイルにPDF化し、毎週月曜日にメール送信
- 保護者アンケートや学校評価はWebを活用（記名式に変更することで回答率向上）
- 地図の電子化（国土地理院の「地理院地図」を活用し、児童の住所・通学路・登校班・スクールガードの位置をデータで一括管理）
- 職員会議資料の電子化

②わかりやすさを追求

- 曜日ごとに複雑だった下校時刻を整理（A～Cの3パターンに整理し、職員・保護者・児童にもわかりやすく変更して提示）
- サーバのフォルダ階層を整理（業務の項目、内容の詳細、年度の3階層程度に整理・共有し、必ずサーバ内に保存して共有）
- 出退勤管理を職員室入口のPC入力に変更（時間外45時間までの残り時間を表示し、在校等時間をリアルタイムで自己管理）
- 机上整理を徹底（目的の資料を10秒以内に取り出せるようファイル整理を励行）

③時間削減のための取組

- Teamsで欠席連絡を自動化
- 朝の打ち合わせを全て廃止
- 業務連絡用ツールを複数用意（職員室入口の連絡ボードとTeams、時間外の連絡があればLINEWORKSを活用）
- 職員室内に大型モニタを設置し、週予定表を提示（教務の業務を削減）
- 学校徴収金の自動引落とし（業務量削減のため、定期引落しは年2回のみ調整）

4 成果と課題

集まってきた情報・試案を集約し、その一部を実現できたことで、業務改善に係る機運がさらに高まった。予見できる課題に足踏みせず「走りながら考える」スピード感と、「できるためにはどうすればよいか」をポジティブに話し合うことで、思いもよらない新しいアイデアに何度も遭遇できた。その結果、令和4年度は、前年度比で一人当たり年間約97時間を削減する成果となった。

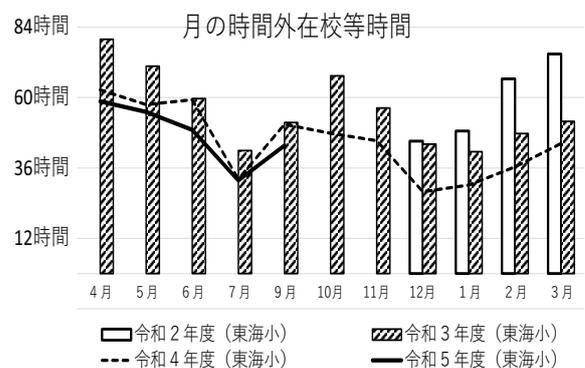
この削減時間の一部は、今年度より職員主体で発足した研修組織「東海塾」で、多様な研修に効果的に活用されている。

なお、グラフのとおり、時間外在校等時間が多い4月の業務改善が大きな課題である。

5 おわりに

働き方改革を進める上では、効率的な働き方をいかに習慣化できるかが鍵である。例えば、退勤前5分間の机上整理・ファイル管理だけで、働き方は劇的に変わる。本校では、「出退勤チェック10」と題し、校務支援システム入力のタイミングや机上の整理など、退勤までにやるべき10項目を提示しているが、特に若手職員に対しては、習慣化するまで粘り強く支援し、具体的なアドバイスを送ることが大切だと考えている。

今後も自由な発想で楽しみながら、みんなで力を合わせて、更なる業務改善に努めたい。



【東海小学校の時間外在校等時間の変化】

【連載・県立高校の今】 第4回 鎌ヶ谷西高校（保育基礎コース） 国府台高校、成東高校、大多喜高校（教員基礎コース）

県教育庁企画管理部教育政策課高校改革推進室

1 保育基礎コースについて

保育士及び保育教諭については、令和6年度に現在より約3,500人程度多く必要と見込まれており、保育・幼児教育を担う人材の確保が急務となっている。今後も、保育基礎コース設置校の拡充などにより、保育・幼児教育分野における担い手の更なる育成が求められる。

本コースは、小学校入学前までの乳幼児に対する保育や幼児教育に興味・関心を持ち、保育士や幼稚園教諭等を目指す生徒が、その基礎的な素養を身に付けるとともに、夢や意欲、職業意識等を育むことを目的としている。

本稿では、「第1次実施プログラム」により令和6年度から本コースを設置する鎌ヶ谷西高校の取組について紹介してもらった。

設置校	設置年度	設置学科
市川南	平成31年度	普通科
四街道北	令和2年度	普通科
鎌ヶ谷西	令和6年度	普通科
土気	令和7年度	普通科

保育基礎コース設置校一覧

2 鎌ヶ谷西高等学校の取組

(1)生涯学習としての保育

鎌ヶ谷西高校では令和6年度入学生から、保育基礎コースを設置する。平成30年度から、すでに「保育の学び」として保育教育に取り組んできた実績を生かし、生涯学習の視点から、より多くの生徒に保育教育に触れてもらう予定でいる。具体的には、3年次からコース設定を行い、クラスを固定せず、より多く

の希望者がコースを選択できるように計画中である（ただし、2年次の「保育基礎」履修が必須）。保育士を目指さなくとも、保育の知識と技能は、将来の家庭生活や経済生活に必ず生かされると考える。

(2)実績のある理論と実践

本校では、2年次に「保育基礎」（2単位）を履修した生徒が、3年次に本コースを選択し、「保育実践」（3単位）、「保育課題研究」（2単位）－以上必履修－に加え、「保育表現活動」（2単位）－選択－を履修し、保育関連科目で最大9単位を学習することになる。また、授業の内外で以下のような行事や実習・体験が準備されている。

- ①保育園実習、保育園ボランティア
- ②聖徳大学、聖徳短期大学、千葉敬愛短期大学による連携授業
- ③保育技術検定の取り組み
- ④文化祭、学校説明会、地域施設・行事への出品

以上は、本校がこれまで「保育の学び」で行ってきた活動で、すでに実績があるものである。

(3)充実した家庭生活と社会生活のために

～自信を持って「未来」に進む～

本校では、本コースでの学習を通じ、社会を構成する基本単位である家庭生活の意義や次代を担う子どもを育てることの重要性と喜びを感じることができる生徒を育てていこうと考えている。



保育基礎コース紹介ポスター

3 教員基礎コースについて

本県の教員採用選考は、年々倍率が低下しており、令和4年度選考の実質倍率では、小学校で2.03倍、中高共通で4.23倍と全国平均（小学校2.52倍、中学校4.66倍、高等学校5.36倍）を大きく下回っている状況にある。今後も、教員基礎コース設置校の拡充などにより、更なる人材の育成が求められる。

本コースは、教育に関心を持ち、将来教員を目指す生徒が、教員としての基本的な素養を身に付けるとともに、夢や意欲、職業意識等を育むことを目的としている。

本稿では、「第1次実施プログラム」により令和6年度から本コースを設置する国府台高校、成東高校、大多喜高校の3校に、各校の取組について紹介してもらった。

設置校	設置年度	設置学科
千葉女子	平成26年度	普通科、家政科
安房		普通科
我孫子	平成30年度	普通科
君津		普通科
国府台	令和6年度	普通科
成東		普通科、理数科
大多喜		普通科

教員基礎コース設置校一覧

4 国府台高等学校の取組

(1)はじめに

本校は、今年度創立80周年の節目を迎え、これまで24,000人余りの卒業生を輩出している。もともと教員を目指そうと考えている生徒が多く、毎年卒業生の何名かが、県内外の教員になっている。

これまでの取組として、平成31年度『ちばっ子「学力向上」プラン』内に位置づけられていた「お兄さん、お姉さんと学ぼう」事業を継承した学習指導体験を毎年夏季休業中に近隣の小学校で実施している。この指導体験には、毎年40名程度の生徒が参加しており、生徒には好評の行事である。体験終了後には、小学生からお礼の手紙を貰うこともあり、参加した生徒一人一人が自己肯定感を高めるとともに、教員の仕事について改めて考える場ともなっている。



小学校での学習指導体験の様子

また、10月には教職員課主催の高校生向け出前講座「せんせいっていいもんだ」が実施され、夏季休業中の学習指導体験に参加した生徒だけではなく、教職に興味を持っている多くの生徒が受講している。教職員課の職員から千葉県が求める教師像や採用までの道のりについての説明を聞くことができるだけでなく、本校の卒業生で現役の教員から実体験に基づいた話を聞くことができるため、憧れ

の職業から一步踏み込んだ職業観をもつことができる良い機会となっている。

(2)コースの概要

教員基礎コースは、2、3年生での希望制とし、クラス編成は行わない。学習内容は現在検討しているが、既にコースをもっている学校の教育内容を参考に組み立てることとした。今ある学校の資源を有効に活用しながら、生徒が教員としての基本的な素養を身に付けるとともに、様々な教員の仕事を体験できるような仕組みを作っていきたい。

教員基礎コースでの体験や学習をとおして、教員という仕事についての理解を深めるとともに、生徒の漠然とした「夢」、「将来へのビジョン」がより明確になるような手助けをしていきたい。

5 成東高等学校の取組

(1)はじめに

令和5年度に創立123年となる本校では、これまでも教職を目指す生徒が多く、現に県内各地域で多数の卒業生が教員として活躍している。

平成29年度より、学校設定教科「つくもタイム」の中の1科目「教育基礎」(2単位)において、提携協定を結んでいる大学の先生の講義を受けたり、山武市立成東小学校でのサブティーチャー実習を行ったりしている他、希望者を対象に、近隣の複数の小学校での1日教師体験の機会を設けるなど、教職志望の生徒に向けてのプログラムを実施してきた。

令和6年度に設置する教員基礎コースでは、これまでのこうした実践をさらに充実させ、教育に興味関心を持ち、進路選択の候補の一つに教員を入れる生徒が増えるよう取り組んでいく。

(2)コースの概略

普通科、理数科どちらの生徒でも教員基礎

コースは受講可能である。また、2年次の「教育基礎」、3年次の「教師体験基礎」の両方を履修・修得した場合は、「教員基礎コース修了証」を授与する。

①1年次の学習内容

希望者は、2、3年次で実施するいくつかの授業に参加できる。

- 小学校での実習
- 成東高校を卒業した現役若手教員による講演会 など

②2年次の学習内容

「教育基礎」(学校設定科目、1単位)を、選択科目として設置。夏季休業中や通常の授業を行わない日を中心に行う。

- 小学校、中学校及び特別支援学校での1日または半日実習
- 県内の教育系大学と連携した授業 など

③3年次の学習内容

「教師体験基礎」(学校設定科目、2単位)を、選択科目として設置。

- 千葉大学教育学部と連携した授業
- 成東小学校でのサブティーチャー実習(年10回)
- 近隣の中学校での1日実習
- 成東高校を卒業した現役若手教員による講演会
- つくもタイム発表会 など



1日教師体験の様子(左)
サブティーチャー実習の様子(右)

6 大多喜高等学校の取組

(1)はじめに

本校では令和4年度から「教育関係職希望講座」（学校外の学修）を実施しており、令和5年度の講座修了者には「教員基礎Ⅰ」（1単位）を認定する。これは、教員（幼保も含む）を志す生徒向けに、体験的な活動を通じてその進路意識を醸成し、将来は地元に戻り、地域に貢献できる人材を育成することも目的としている。本コースのカリキュラムや運営等についてはこの講座が基盤となっており、市町村教育委員会の御理解と御協力のもと、これまで2年間の取組を通じ、地元の小学校・中学校・特別支援学校・幼稚園・保育所と連携し、充実した体験活動が実践されてきた。

この取組の特徴としては、(1)体験的な活動の重視、(2)特別支援教育の充実、(3)本校卒業生の活用が挙げられる。

(2)体験的な活動の重視

7月と12月に体験実習を実施している。受入先は、自分の卒業した学校（含む幼保）で実習をお願いしている。実習後には、全員で「振り返り」を行い、体験を通して得られたことを他者と共有し、情報交流することで、新たな視点や考えを持つことができ、有意義な活動の一つになっている。

(3)特別支援教育の充実

本校に配置されているスクールカウンセラーを講師に実際の障害特性について学んだり、自身が障害をもつ大学の先生の講義を聞いた。校種に関わりなく特別支援教育を理解することは大変重要であると考えている。

(4)本校卒業生の活用

教職員課の事業である「せんせいっていいもんだ」を活用している。本校はこれまで現場で活躍する教員を数多く輩出しており、こ

の事業では、採用2～3年目の若手教員が派遣される。「教員を目指すために高校時代に努力すること」「教員としてのやりがいや喜び」など生の声を聴くことができるのは大きな魅力である。また、授業づくりコーディネーターや現場で勤務する卒業生を講師として、教材研究や授業づくり、生徒指導などのケーススタディを学ぶカリキュラムも用意している。

これらを基盤として、本コースでは「教員基礎Ⅰ」、「教員基礎Ⅱ」を設定している。本コースは、あくまでも受講希望者を対象としており、一つのクラスにまとめず、放課後や考査後の空き時間等をうまく活用して、部活動等と両立しながら受講することができる。意欲が向上して更に学びを継続もできるし、一旦変更もできる。生徒の主体的な進路決定をする上でもこの方法を採用した。

教員基礎Ⅰ（1単位）	教員基礎Ⅱ（1単位） 予定
①オリエンテーション【説明】	①オリエンテーション【説明】
②教育の魅力についてⅠ【講話】	②教育の魅力についてⅠ【講話】
③学校の日常について【講話】	③学校の日常について【講話】
④実習体験（幼保小中）【実習】	④実習体験（幼保小中）【実習】
⑤実習体験の振り返り【演習】	⑤実習体験の振り返り【演習】
⑥高大連携特別授業【講義・演習】	⑥授業づくり①【演習】
⑦実習生から学ぶ【講話・演習】	⑦授業づくり②【演習】
⑧実習体験（特別支援）【実習】	⑧実習体験（特別支援）【実習】
⑨先生っていいもんだ【講話】	⑨先生っていいもんだ【講話】
⑩実習体験（幼保小中）【実習】	⑩実習体験（幼保小中）【実習】
⑪実習体験の振り返り【演習】	⑪実習体験の振り返り【演習】
⑫1年間の振り返り【演習】	⑫授業づくり③【演習】
⑬教育の魅力についてⅡ【講話】	⑬1年間の振り返り【演習】
	⑭教育の魅力についてⅡ【講話】

各科目の計画一覧



小学校での実習体験の様子

思いっきり遊ぶ単元の魅力 単元「まいにち すべりだい」 ～すべり台ランドを作って、みんなで遊ぼう～

千葉市立金沢小学校教諭

よしだ
かまだ
鎌田
ゆうこ
しゅんいち
優子
俊一



1 はじめに

本校は創立27年目を迎えた、通常の学級23学級、特別支援学級（のぞみ学級）3学級で全校児童721名の比較的大規模の学校である。本稿では昨年度末にのぞみ学級で取り組んだ生活単元学習の実践を紹介する。

2 単元について

のぞみ学級には9名の児童が在籍し、これまで生活単元学習では、学校行事や宿泊学習に向けての取組や遊びなど、子供たちの興味・関心に応じて単元を設定し取り組んできた。子供たちと相談し、思いっきり遊び込んで年度を締めくくろうということになった。

3 単元期間の様子

教室前のオープンスペースを利用して、遊び場を作り、思いっきり遊ぶようにした。単元初日にすべり台を完成し、すぐに遊べるようにあらかじめ足場は組んでおいた。すべり台の組み立ては、インパクトドライバーを使用して、次々と木ネジを打ち込んでいけるようにした。すぐにコツを掴んで夢中になって組み立てを終え足場に設置し、さっそく滑ってみることにした。初めは尻込みしていた子供も繰り返し滑るごとにスリルや楽しさに気付き、滑り終わるとすぐに走って戻り、階段を昇って順番を待つようになった。

友達と自然に関わって遊べるように毛布を用意すると、毛布に包まることでよりスピードが増すことに気付いた。複数枚の毛布を追加すると、今度は一人ではなく友達と一緒に毛布に乗り大勢で滑るようになった。この単元期間中で大事にしたのは、教師も一緒に

なって夢中で遊ぶことである。そうすることで遊び場全体に勢いが生まれたり、一体感が生まれたりすると考えた。繰り返し取り組むことで自然に友達同士が誘い合い、一緒に滑って遊ぶ姿が見られた。



友達と一緒にすべると楽しい！

本校舎三階から聞こえてくる楽しい歓声は一気に全校児童の話題となり、「一緒に遊ばせてください」という声が届いた。相談したところ、「みんなで一緒に遊ぼう」「遊び場の楽しみ方を教えてあげよう」ということになった。よりスリルを味わうためには、頭を前にしたり、仰向けの姿勢で滑ったりすると楽しいということを普段交流に行っているクラスの友達に教えてあげる姿も見られた。

4 おわりに

単元全体を振り返ってみると、夢中になって長時間集中して一つのことに取り組む姿をたくさん見ることができた。教師にとっても新しい発見の連続となり、思いっきり遊ぶ単元のもつ大きな魅力と夢中になった時の子供たちのすごさを感じることができた。

子供たちが仲間と自然に関わり合いながら主体的に取り組む学校生活の実現に向けて、これからも授業づくりを進め、自分から取り組むための「できる状況」を整えていきたい。



土器ッと古代“宅配便”

千葉県教育振興部文化財課文化財普及・管理班 上席文化財主事 **にしむら だん**
西村 壇

文化財課では、県民の歴史や文化に対する興味・関心や理解を促すため、学校等の教育機関を中心に、公民館等の社会教育施設、各種イベント会場等への出張展示や出前授業、体験学習指導を行う「土器ッと古代“宅配便”」を実施している。今回は体験内容を紹介する。

1 土器ッと学ぼう（展示解説）

千葉県では2万箇所を超える遺跡が発見されており、これらの遺跡から出土した打製石器や磨製石器、土器等の実物を用いて、当時の暮らしの様子について解説を行う。解説時に、実物に触れることで、歴史や考古学への興味・関心につながることを期待している。

2 火おこし

古代の火おこしとして、複数人で火切棒と弓を用いて、火だねを作り、麻で作られた玉に移して、火をおこす。弓と火切棒の動かし方に苦勞することもあるが、慣れてコツをつかむと小学生だけでも火がおこせるようになり、大きな達成感を生むとともに、火をおこす大変さを実感できる。



火おこしの様子



実物に触れる体験

3 土器ッとしおりづくり

土器片の文様を紙に写し取り、しおりを制作する。色使いにより、自分だけのカラフルな文様を浮かび出させ、細かな文様の観察も可能である。なお、しおりづくり体験は未就学児でも楽しめる体験の一つである。

4 勾玉づくり

県内でも、縄文時代や弥生時代、古墳時代の様々な色、形の勾玉が出土している。当時はヒスイやメノウなどの硬い石を使っていたようだが、体験では軟らかく削りやすい滑石を用いる。滑石を砥石に擦り付けながら形を整えていき、紙やすりで磨き上げ、形も大きさも人それぞれの世界に一つだけの勾玉が完成する。勾玉にひもを通して、児童が首から下げた時の表情は笑みにあふれる。

なお、これらの体験内容を組み合わせて行うことも可能である。石器や土器に触れ、火おこしや勾玉づくりなどを通して、当時の人々の努力や工夫、知恵を感じ取り、文化財ファンが増えることを願っている。



詳しくはこちらのQRコードから

千葉教育 梅 (No. 683) 令和5年11月30日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 鉄井 修一
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>
印刷所 千葉市療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465

次号予告

『千葉教育』菜 (No.684)

◆特集 児童生徒の学習意欲の向上

○シリーズ 現代の教育事情

県教育庁教育振興部学習指導課

帝京平成大学人文社会学部 教授

佐瀬 一生

○提言

ホキ美術館 館長

保木 博子

令和5年度 シリーズ 現代の教育事情

蓮 680号	千葉の教育150年
萩 681号	生徒指導の充実
菊 682号	特別支援教育の推進
梅 683号	キャリア教育の推進
菜 684号	児童生徒の学習意欲の向上
桜 685号	チーム学校の充実

「千葉教育」は千葉県総合教育センターの
Web サイトから閲覧・ダウンロードできます。

千葉教育
梅号 読者アンケート



表紙写真について

県立多古高等学校 毎朝行われている「朝の挨拶運動」と登校の様子
～地域の様々な方に見守られて～